

金船社發行

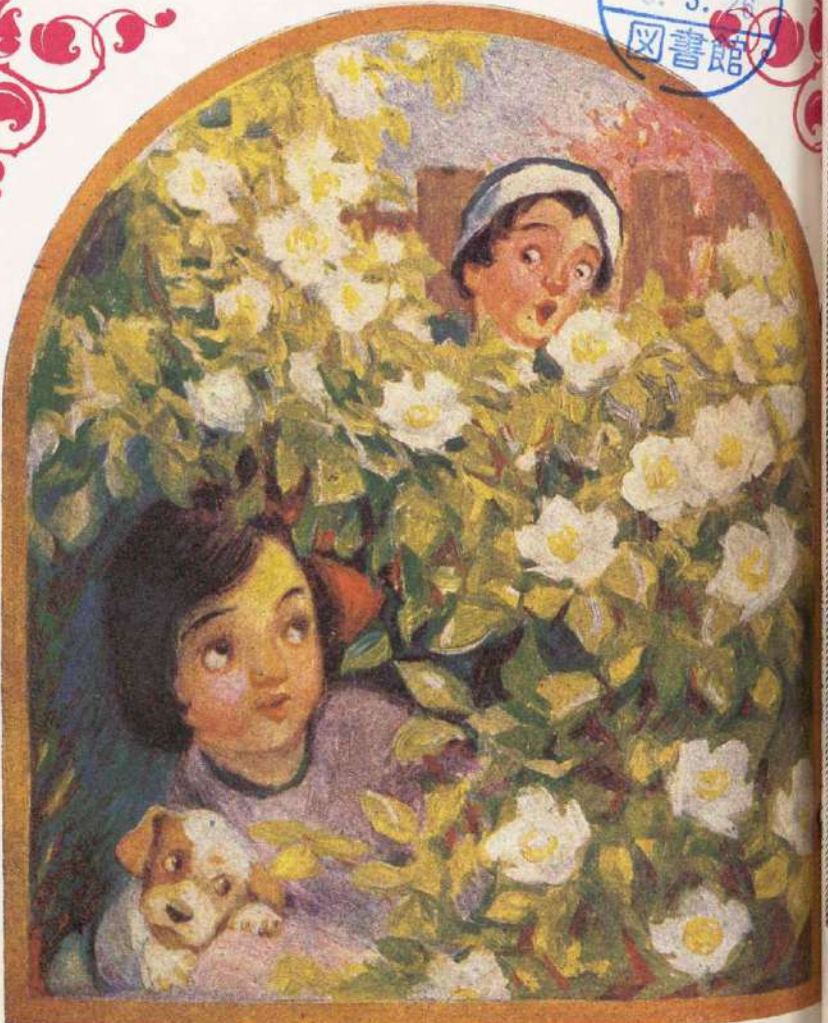
金の星

六月號

Z3 B 88

国立国会
8. 3. 28
図書館

大正十一年五月五日印刷
大正十一年六月一日發行



『金の船』が六月號より『金の星』と
變つた事について讀者の皆様に申上げます

皆様からそれはく可愛がられて御愛讀を受けてをりました『金の船』は、ますます盛大になつて参りました。發行の部數も月々に増えて、唯今では日本で發行される少年少女雜誌中他に比べるものがない立派な雜誌だと、學校から家庭からも、大層な御歓迎を受けて参りま

した。これも本當に愛讀者の皆様が『金の船』『金の船』といつて愛して下さつたからで、深く御禮を申上げます。ところが、今度、はからずも『金の船』發行のことにつきまして、大變に面倒なことが起つたのでございます。と申しますのは、是迄の發行所名義になつてをり

ましたキンノツノ社と出資創刊者で、そしてまた編輯主幹である齋藤佐次郎氏との間に面倒が起つたのであります。齋藤氏はキンノツノ社に托してをうては、到底安心して雑誌を発行いたす事が出来な事情となつたのであります。そこで齋藤氏は此の度、断然キンノツノ社の關係を断ち、雑誌の題もこの際『金の星』と改めて、本月號より發行いたす事となつたのであります。

この事につきましては、外にも深い事情がございますが、それは何れいゝ折を物も澤山に加へて、理想的編輯をいたします。沖野先生の「父戀し」や窪田先生の「義経物語り」や三宅先生の「家なき子」などの續き物が、この後どんなに面白くなるか、それはこれから出る毎號の『金の星』を讀んで下されば、お分りになります。

尙『金の星』のために、全力を擧げて御力添へを下さる事を約して下さつた先生方の御名前を擧げますと、次の通りであります。

楠山正雄、馬場孤蝶、藤澤衛彦、窪田空穂、中島

見て發表いたし、此處にはたゞこれ迄の『金の船』がそのまゝ『金の星』と變つて、これまで通りと少しの變りもなく、それどころか、ますます面白い童話や童謡や畫をいっぱい載せて、愛讀者の皆様の前に現れる事になつた事だけを御報告いたします。

『金の星』はこれをいゝ機會として、皆様方が驚くほどの一大活躍をいたすことを誓つて置きます。外の雑誌では、とても見られない獨特の面白い讀物や畫の外に、尙新しい時代に適つた清新な讀

孤島、西條八十、若山牧水、山本鼎、吉田敏二郎
三木露風、灰野庄平、興謝野晶子、三島章道、霜田史光、志賀直哉、水谷勝、中山晋平、人見東明
小林愛雄、久米正雄、百田宗治、長田秀雄、藤森秀夫、濱田廣介、前田晁、宮島資夫、茅野雅子、三宅房子、小山内薫、鈴木善太郎、秋庭俊彦、西川勉、鈴木善太郎、植松壽樹、山本文江、内藤豊雄（順序不同）

これ等の諸大家方のお力添へと、尙外に大勢の新進の先生方のお力を得て、『金の星』は今後に於てわが國の少年少女雑誌中の模範雑誌として皆様方の御家庭からは勿論、その外あらゆる處に於て御歓迎を受ける事でありませう。そして、



その講演部は、これまで通り童話は沖野先生、童謡は野口先生が擔任されて、一層の活躍につとめます。

尙、『金の星』の顧問と同人のお名前を挙げますと、

顧問 本居 長 世氏
顧問 沖野岩三郎氏
同人

岡本 歸 一氏
野口 雨 情氏
齋藤 佐次郎氏

以上の先生方であります。

また發行所の名は『金の星』がいはゞ『金の船』の變へ名であることを皆様の御記憶に留める爲めに『金の船社』といたします。若し他から『金の船』と云ふ標題をつけた雑誌が發行されるかも知れませんが、それは『金の星』とは全く別物であります。皆様方の御迷惑になるといけませんから御注意を申し上げます。

東京市外田端三五一番地

『金の星』發行所 **金の船社**

電話小石川五三八七番
振替東京五九五九六番

目次

かくれん坊(表紙原色版) 岡本歸一
大變だ、大變だ(口繪三色版) 野口雨情

七面鳥(曲譜) 一 野口雨情

大統領様へ(童話) 四 沖野岩三郎

小鳥の仙吉(童話) 三 吉田漾之助

風(童話) 三 内藤豊雄

義経の奥州下り(史譚) 三 窪田空穂

籠の瓜がなくなる話(童話) 三 田中實

泣き〜天使(童話) 三 秋庭俊彦

わたくしのふてばこ(幼年詩) 元 松本幸枝

硝子の國(幕張童話) 四 野口雨情選

人攫ひ(入道童話) 四 水野成三

小豆洗ひの話(傳説) 四 藤澤衛彦

笛(童話) 四 霜田史光

鈴蘭の花(推薦童話) 五 二瓶けい子

鶏頭の芽 橋本静雨

林檎ひとつ(童話) 六 奥山晃一

お話賣り(童話) 六 志村照子

家なき子(名作童話) 六 三宅房子

おしやれ椿(童話) 七 野口雨情

父さんの新聞を見ると(自由畫) 七 山本鼎選

カアチヤン(幼年詩) 七 若山牧水選

唱歌帳と姉さん(雜方) 七 編輯部選

通 信 八

(附録)

長篇物語 父戀し(第五回) 沖野岩三郎
父よりの手紙





大變だ、大變だ

岡本歸一畫

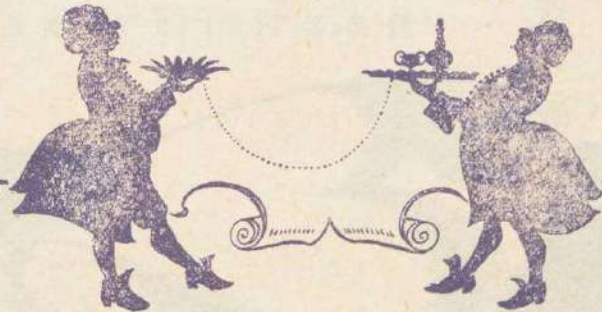
ジミイはカバンを机の上に置くとすぐ、一目散に従姉のエルジイの所へ走って行きました。そして家の表から、

「エルジイ、エルジイ、大變だ、大變だ」と呼びました。

丁度學校から歸つてゐたエルジイは、ジミイの聲を聞いて、吃驚して表へ出て來ました。

「まア、どうしたの？ ジミイ。」

(大蛇御探への八頁を御覽下さい)



抒情詩
名作叢書

▽賣ゆき空前の記録を示す本詩集を未だ知らざる者ありや？

第一編 西條八十先生 **静かなる眉** 特に若い人々のために
歌はれたる優しき詩集 九拾錢

第二編 水谷まさる先生 **寶石の夢** 乙女の夢の清く床しか
れとの美しき涙のあと 九拾錢

第三編 野口雨情先生 **別後** 涙なしに讀む能はざる
殉情限りなき民謡詩集 九拾錢

第四編 竹久夢二先生 **青い小徑** 優しき詩と美しき畫
十枚とよりなる詩畫集 九拾錢

第五編 人見東明先生 **愛のゆくへ** 清き心は又清き詩を生
む美しき詩は愛の雫より 九拾錢

▽月下に金鈴の鳴りひびくが如きこの好詩集を繙かれよ！

野口雨情先生著 本文約三百頁。定價一圓。送料金十錢

五版 出來
童謠作法問答

著者の童謠集十五夜お月さんは、何故に台覽を蒙りしか、何故に文部省が認定せしか、著者が郷土童謠に造詣の深きことは現代何人も及ぶものなし。本書は初學者のために一々作例をあげて新しき童謠の作り方を説きし童謠の指導書なり

東京 東神田区南保町二〇四 交蘭社 六十七 九

郵便切手切便
郵切手切便
註文の増割
二はこの



七面鳥

本居長世作曲

Musical score for 'Seven-Faced Bird' (七面鳥) by Naoyuki Honjū. The score consists of five staves of music with corresponding lyrics in Japanese. The lyrics are: しちめんてうが いぬがたつて おこつたの しらめんてうはほんとに おこつたの いぬがあつちへ おこりんぼ いちつたからおふらないで

社 眉 白
纂 編 部 輯 編

音楽講話叢書

進 呈
内容見本

◇西洋音楽の發展につれて音楽上の諸科目の知識を得やうとする江湖の要求を醫さんが爲めに生れたる叢書であります。煩に互らず、簡単に要領を得るよう書いてあるのが本叢書の特色で、内容種類は音楽に關するあらゆるものを網羅してありますから、本叢書を座右に備へて置けば音楽の事一として分らぬものはないのです。

[刊 新]

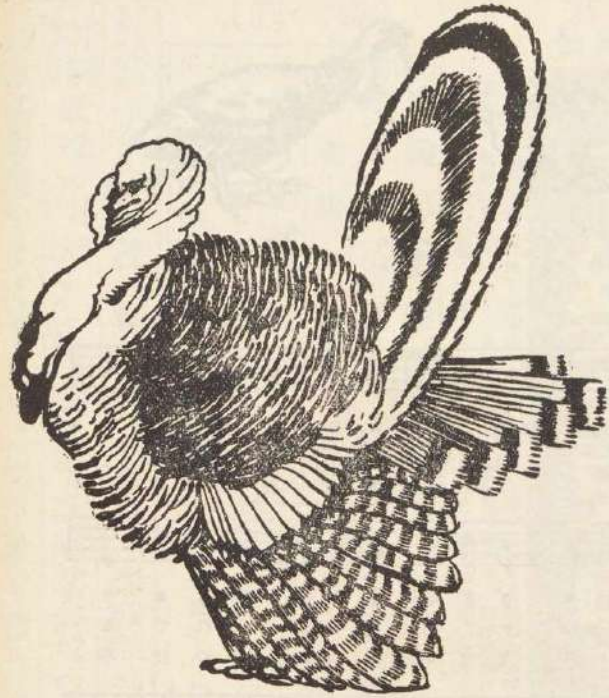
- (1) 楽譜の知識 (本譜早) 五十錢 送料四錢
- (2) オペラの話 八十錢 送料四錢
- (3) 聲樂研究法 八十錢 送料四錢
- (4) ピアノの習ひ方 八十錢 送料四錢
- (5) オーケストラの話 八十錢 送料四錢
- (6) 音樂解説辭典 一圓卅錢 送料六錢

中山氏作曲 附 學校の學旅 (新童話) 三十錢 本居氏作曲 三十錢
中山氏作曲 附 故郷の唄 (新童話) 二十錢 佐々木氏作曲 二十錢
中山氏作曲 附 旅人の唄 (新童話) 二十錢 佐々木氏作曲 二十錢
土屋氏作曲 童謡樂譜やまばと (新童話) 三十錢 山本氏作曲 二十錢
中山氏作曲 附 創作曲譜 (第四) 二十錢 宛 白眉氏編 二十錢 宛 白眉氏編 二十錢
中山氏作曲 附 創作曲譜 (第六) 二十錢 宛 白眉氏編 二十錢 宛 白眉氏編 二十錢
中山氏作曲 附 創作曲譜 (第八) 三十錢 宛 春柳氏編 三十錢
中山氏作曲 附 創作曲譜 (第十) 五十錢 宛 白眉氏編 五十錢
中山氏作曲 附 創作曲譜 (第十二) 五十錢 宛 白眉氏編 五十錢
中山氏作曲 附 創作曲譜 (第十四) 五十錢 宛 白眉氏編 五十錢

- [刊 續]
- ◎音樂人名辭典
 - ◎小謠作曲法
 - ◎ヴァイオリンの習ひ方
 - ◎音階の話
 - ◎マンドリンギターの習ひ方
 - ◎日本音樂の話
 - ◎ハーモニカの習ひ方
 - ◎和聲學初步
 - ◎音樂の聴き方
 - ◎簡易音響學
 - ◎舞踊の話

社 版 出 眉 白

八六四黒目下外市京東
八九五四五京東替振



七面鳥

野口雨情

七面鳥が 怒つて

ふくれてる

七面鳥よ なんだつて

怒つたの



犬が立つて 見てたから
怒つたの

七面鳥は ほんとに

怒りんぼ

犬があつちへ

行つちやつたから
怒らないで



大統領様へ

沖野岩三郎

ジミイはカバンを肩に掛けて、元氣よく學校から歸つて來ました。そして家の表まで來た時、そこにある高い／＼櫟の樹の上を、何心なく見ますと、東の方の枝に、何だか知らないが、黒いものがありました。

「おや、何だらう？」と呟きながら、ちつと見てゐ

ますと、その黒い塊の中から一羽の烏が飛び立ちました。

「あ！ 烏の巢だ！ しめたぞ！」

小踊りして喜んだジミイは、カバンを樹の根において、お猿のやうに身輕に、する／＼と高い／＼樹の上に登りました。そして巢の中を覗いて見ますとそこには可愛い可愛い小烏が七羽、小い目玉をキョロ／＼させて、巢の中が狭苦しいと云ふやうに、押し合いつこをしてゐました。

「まあ可愛い黒ちやん。おや／＼一人二人……五人

しさうにカア／＼と鳴いてゐました。

「大丈夫だよ。烏の母あさん。僕はね、此の黒ちやん達に、旨しい／＼山羊の乳を飲ませて育て、あげ

るから……」

言ひながらジミイは、ちつと上を見てゐると、頻りに鳴きながら飛んでゐる母烏の眼には、涙が一杯溜つてゐるやうに見えました。

「あ、烏の母あさん、泣いてゐる！」と思はず叫んだジミイは、ポケットの中から、二羽の黒ちやんを取出して、元の巢に返してやりました。そして急いで下に降りて來ますと、庭の所に立つてゐた祖父さんは、ことりと、ことりと靴を鳴らしながらジミイの側へ近寄つて來ました。

「さあ、大變な所を見つかつたもんだ！」と思つたジミイは、ガツくりと頭を頂垂れて立つてゐました。「ジミイ！」と言つた祖父さんの聲は潤んでゐました。

「はい……」と言つたジミイの聲は泣聲でした。

……七人、君達は七人もこんなところに居ちやあ狭くつて、やりきれないだらう？ どうだい、二人だけ僕の所へ行かない？ さうするとね、僕は毎朝山羊のお乳を飲ましてあげるよ。僕の家は貧乏だけれどね……それでも山羊を一定飼つてるんだよ。さあ黒ちやん、二人だけ僕の所へ行きませう。」

ジミイはさう云つて、両方のポケットへ黒ちやんを二羽入れました。そして幹を傳つて下に降りようとしてますと、不意にヒュー！ と黒いものが頭の上に降りて來たと思ふと、悲しさうな聲で、カア！

カア！ と烏が二聲鳴きました。

ジミイは吃驚して頭を上げてみますと、それは黒ちやん達のおつ母さんの、母鳥でした。

母鳥は大事の／＼子鳥を二人、悪い／＼人間の子供に奪つて行かれるので、さあ大變な事が起つたものだと思つて、巢の所まで飛び歸つて來ましたが、矢張り子供達の所へは近寄るのが恐くないので、一二間離れた所で、大きく又小さく輪を描きながら、悲

「ジミイ、あなたは今、鳥の子を取らうとしたな？」
「僕、あんまり可愛いもんだから、二羽だけ持って
来ようとしたんだけど……鳥の母あさんが、あんま
り泣くもんだから……」
「さうか、よし／＼。鳥でも人間と同じやうに子供
は可愛いんだから。」と言って、祖父さんはポロポロ
と涙をこぼしました。
何だか様子が變だと思つたジミイは、
「祖父さま、どうしたの？ どうして泣くの？」と
訊きました。



「うん、さうだ。だから祖父さんの子供はもう三
人になつた。ジミイは二羽の鳥の子を、鳥の母あさ
んに返してあげた。けれども死んだ私の二人の子は、
もう誰も返しては呉れないんだ。だから私は泣いた
んだ。」

言ひながら、祖父さんはまた泣きました。
「では、祖父様、僕のお父様も、エルジイのお父様

祖父さまは不意にこんな事を尋ねました。

「まあ！ 祖父さま。解つてるぢやあないの？ こ
んな事。僕のお父様が一番兄様で、その次がエルジ
イのお父様で、其次がフレツデイのお父様、それか
ら粉屋の叔父さんと、八百屋の叔父さん、お父様は
五人兄弟。僕の叔父様は四人ぢやあないの？ どう
してそんな事を訊くの？」

ジミイは涙に濡れた祖父さんの頬つべたの所を、
ちろ／＼見詰めながら言ひました。

「さうだ、今日までは然うだつたが、もう今日から
は、ジミイの叔父さんは二人ッ切りだ……」

「え？ どうして？」

「今朝ネ、お役所から手紙が来た。その手紙による
と、粉屋の叔父さんと、八百屋の叔父さんは、佛蘭
西のソナムといふ所で、此月の四日に討死したとい
ふ事だ。」

「まあ！ あの……粉屋の叔父さんも……八百屋の
叔父さんも、討死しちやつたの？」

も、フレツデイのお父様も、討死するんぢやあない
でせうか。僕困るワそんな事があつては……」

ジミイは、ポロ／＼と涙を流しながら問ひました
「さうだ、私もそれを心配してゐる……此のまゝに
もう三月も戦争がつゞけば、可哀さうだが、ジミイ
のお父様も、フレツデイのお父様も、エルジイのお
父様も、皆な討死するかも知れない。」

祖父様は、さう言つて俯向いてゐました。

ジミイは大人のやうに胸組をして考へてゐました
が、不意に、

「祖父さま、アメリカが戦争を廢めるのは、矢張り
大統領様のお布令が出ないといけないんだね。」
と問ひました。

「さうだとも、戦争を始める時も、廢す時も、みんな
大統領様のお布令が出るんだ。けれども大統領様
はなか／＼此の戦争を廢さうとはなさらない。困つ
たものだ……」

祖父様は眼に涙を一杯溜めて、襟の樹の上を見ま

した。そこには七羽の小鳥が母あさんに、何だか強請るやうに、ガア／＼と鳴いてゐました。

ジミイはカバンを机の上に置くと直ぐ、一目散に



八
從姉いエルジイの所へ走つて行きました。そして家の表から、

「エルジイ、エルジイ、大變だ、大變だ。」と呼びました。

丁度學校から歸つて、おツ母さんに、書取が満點であつた事を話してゐたエルジイは、ジミイの聲を聞いて吃驚して表へ出て來ました。

「まア、どうしたの？ ジミイ。」

エルジイは眼を圓くして言ひました。

「どうもかうもないもんだ。大變なんだよ。」

「大變つて、犬にでも追ッかけられたの？」

「そんな事ぢやアない！ エルジイの叔父さんが、たツた二人ツきりになつたんだよ。」

「まア！ 何を云ふの？」

「だつて、手紙が來たんだもの……」

「何所から？」

「お役所からだだよ、ぢれつたい……」

と呼びました。

それを聞いたフレツデイは、何事だらうと思つて、泡を食つて表へ飛出して來ました。で、ジミイはいきなり、

「フレツデイ、もう御互ひには、叔父さんが、二人ツきりだよ！」と言ひました。

「え？ それぢやア、戦争に行つてる叔父さんが二人死んだの？」

「うん、さうだ。それでネ、お錢を三錢もつて直ぐ僕のところへ來てくれ給へ。」

「その三錢をどうするの？」

「僕の所へ行つたら、ツケを言ふ。今ネ、祖父さまは泣いてるんだよ。」

「さうか、それぢやア待つてくれ給へ。」と云つて、フレツデイは家の中に走つて行つて、墓口の中にあつた一錢銅貨を三つ掴んで飛び出して來ました。

三人は大急ぎで、とツと、とツと、駆けてゐるうちに、間もなくジミイの家へ着きました。

「さうだよ、粉屋の叔父さんも、八百屋の叔父さんも討死したんだよ、フランスで。」

「まア！ 本當？」

「疑ひ深いネ、エルジイ。祖父さまは泣いてるんだよ、今……」

「さう？ まア私、どうしませう。」

「それでネ、お錢を三錢もつて、直ぐ僕と一緒に來てくれ給へ。」

「お錢を三錢？ そんなもの、どうするの？」

「いゝ事があるんだよ。愚圖々々言はないで早く早く。」

ジミイが餘り眞剣なので、エルジイは机の抽出から一錢銅貨を三つ探し出して、それを握つて駆け出して來ました。

二人は一町程隔つたフレツデイの家の表に駆けつけて、一度に、

「フレツデイ、大變だよ、大變だよ。」

「フレツデイ、本當に大變よ！」

「さア、手紙を書くんた。紙と状袋をあげるから。」
ジミイは汗を拭き〜言ひました。

「手紙を何所へ出すの？」

「誰に手紙をあげるんだい？」

エルジイとフレツヂイは不思議さうに尋ねました
するとジミイは小さい聲で、

「もう三月も戦争が續くと、僕達のお父様も死んで
しまふと、祖父様は言つてたよ。だからネ、早く戦
争を廢めるやうにツて、大統領様に手紙を書きませ
う。僕それが一番い
いと思ふんだ。」と言
ひました。

「それはいい思ひつ
きネ。」

とエルジイは感心
したやうに言ひまし
た。

「よし！ 書かう！」



とフレツヂイは活潑に申しました。

そこで三人は大きくて手紙を書きました。

「出来たよ、僕の手紙が一番い〜に決つてる。讀ん
て見ませうか。」とジミイはペンを耳に挟みながら言
ひました。そして、

大統領様、お願ひです。早く戦争をよして、世界
を平和にして下さい。僕のお父様が討死しないう
ちに、戦争を廢してください。たのみます。たの
みます。ジミイ

と讀みますと、エル
ジイは、次のやうな
優しい手紙を讀みま
した。

大統領様に申上げま
す。

私の大事の〜お
父様は、今フランス
のソナムといふ所

早くいくさを止し給へ！

僕のお父様は、たッ
た一人だからネ。

と讀み上げますと、
ジミイもエルジイも呆
れてしまひました。



三人は郵便局へ行つ
て、切手を一枚づつ買
つて、それをポストへ
へ入れました。

さア、此の手紙がワ

シントンへ着くと、直ぐ大統領様は戦争を止すだら
うと信じ切つてゐる三人は、毎日々々休戦の號外を
待つてゐました。

けれども十日経つても二十日たつても、戦争は相
かはらず激しく續いてゐました。

(つゞく)

と言つたフレツヂイは、
「僕のは少々活潑だぞ！ ね、かういふんだ」
大統領殿！

「うまい〜。」

さうなんなんでももの………

大統領様を尊敬する

エルジイより

小鳥の仙吉

吉田 漾之助



山奥の或る淋しい村に、仙吉といふ憐れな孤兒が住んで居ました。

仙吉は両親の名前も顔も知らず、たゞ一人の肉身もない全くの一人ぼっちでした。村の人達も仙吉が何處で生れてどん

な人間であるといふことも少しも知りませんでした。仙吉は丁度三年ほど前、ある雪の降る日に何處からともなくその村に流れ込んで来たのでした。その上仙吉は啞者でした。しかし世間普通の啞者と異つて、耳だけはよく聴えました。それから思ふと、生れつきの啞者ではないやうに思はれましたが、仙吉の人となりを誰も知らないと同じやうに、仙吉がどうして啞者になつたかといふことも知つたものではありませんでした。勿論仙吉自身にも知らなかつたことでせう。いつも髪を長く、まるで枯草のやうに延し、汚いほろ／＼の着物を着て大抵は跌してゐた仙吉は、體は大人ほどもありましたがその鋭い眼の光にも、垢で汚れた皮膚の色にも、何處となくまた子供らしい柔さと元氣とに満ちて居ました。

仙吉には別に家といふものがなく、農家の物置の陰、寺の縁の下、辻堂などがその時々々の仙吉の住居になりました。仙

吉はお腹が空くと山から少しばかりの薪を拾つて来ては、それを農家に持つて行つて少しの食物と換へて貰ひました。そしてどんな場合でも、その薪の代りとしては食物以外一切受けませんでした。村の人が氣の毒に思つてお金など與へても決して取らず、たゞお腹が一ぱいになるだけの食物で満足して居ました。村の親切なお主婦さんなどは、仙吉を可哀さうに思つて、よく色々なものを恵んでやりました。ですから仙吉は寂しいけれど、村の人の情で割合に暢氣に、自由に暮らすことが出来ました。

仙吉は啞者ではありませんでしたが、口笛を吹くことが非常に上手でした。それもおもに小鳥の鳴き聲に限られて居ましたが、それは／＼全く本當の鳥と少しも變らないほどの上手でした。そして仙吉は、鴛でも山雀でもカナリヤでも、何でも小鳥の鳴き聲でしたら、自由自在に吹く事が出来ました。村の人人も誰一人として仙吉の口笛に感心しないものはありませんでした。それだから村の人は仙吉のことを小鳥の仙吉と呼んでゐました。

その村から四五丁ほど離れた山の中に、小さいお宮が祀つてありました。そのお宮を取り圍んでかなり大きな森がありました。そこには昔城があつて俗に「城山の森」と呼ばれてゐました。森の中には小さな池がありました。仙吉は晝間はたゞその池の堤で過すのでした。そしてその巧な口笛で小鳥の鳴き聲を真似ました。すると森にゐる小鳥は皆、同じやうに鳴きながら仙吉の周圍に集つて来るのでした。小鳥は少しも仙吉を恐れるどころか、まるで友達のやうに手や肩にとまつては、可愛らしい聲で鳴くのでした。澤山の小鳥は枝から枝へ飛んだり、また草の上を下りたり、仙吉の肩にとまつたりして、目白は目白の歌を、カナリヤはカナリヤの歌を、如何にも面白さうにまた楽しさうに歌ふのでした。その中で仙吉は、一緒に巧な口笛でその歌に合せるのでした。

或る時は、また堤の草の上で仙吉が村から貰つて来た竹の皮に包んだ握り飯が開かれることもありました。小鳥達はそれを食ふ仙吉のまはりに集つて、同じやうにその白い米粒を拾つて食べました。そしてまた池の水で小さな喉をうるほしては歌ふのでした。それは全く仙吉と小鳥だけが知る樂し

い世界でした。

孤兒の仙吉にはこの世の中で一番親しいものはそれ等の小鳥でした。仙吉は何よりもそれが可愛らしく、小鳥は仙吉の生命であると云つても好い位でした。仙吉はその森の中で小鳥と一しよにゐる間が一番幸福な時で、その間は自分が悲しい孤兒でまた啞者であるといふことも忘れて、まるで小鳥と同じやうに楽しい氣持になるのです。さうして其處で面白く愉快に一日を過し、太陽が西の山にかけられ、森の中も夜の薄衣で包まれて、小鳥達もめい／＼の巢に歸ると、仙吉もまた村へ歸つて行くのでした。

三

それは四月の終頃の或る暖い日のことでした。仙吉はいつものやうに小鳥達と遊んでゐましたが、ふと眠くなつたのでその可愛い鳴き聲を夢のやうに聞きながら、堤の草の上にごろりと寝ころびました。空は濃い藍色に澄み渡つて、時々その表を白い綿のやうな雲が、ふわり／＼と流れて行きました。森の木々は皆滴るやうな緑色に萌えて、枝から枝へ渡る小鳥の聲は、歡樂そのものゝやうにも思はれました。

配さうな仙吉の顔を見ると、次のやうなことを話しました。

その話によると、男は或る國の王様に仕へてゐる家來でした。その王様には一人の可愛いお姫様があり、そのお姫様は非常に小鳥が好きで、いつもお城の中では大きな金網の鳥籠で澤山の小鳥を飼つてゐました。ところがどうしたことが、二三日前からその小鳥が一寸も鳴かない



堤の草は青いカアベツトを敷いたやうで、づつと耳をすますとその小さい一本一本の草が、土の中から養分を吸ひ上げるのが聞えるやうでした。小波ひとつ立てない鏡のやうに池は、四邊の木立をさかさまに寫して靜まり返つてゐました。森の中のもの木も草も、小鳥達もみな生々と歡びに輝いてゐるやうに見えました。仙吉はほか／＼と暖い太陽の光を全身に浴びながら、いつの間にか眠つてしまひました。

しばらくすると仙吉は誰か自分の名を呼ぶやうに思はれたのでふと目を開きました。見ると仙吉の直ぐ側には、西洋のお伽話の中に出て来るやうな立派な風をした一人の男が立つてゐました。その男は鳥の羽の着いた帽子をかぶり、腰には劍などもさけてゐました。

「啞者の仙吉といふのはお前か？」

仙吉が驚きの目を見張りながら、見なれない其の男の様子を不思議さうに眺めてゐると、突然かう尋ねました。仙吉は何だか恐ろしく思ひながらもなづいて見せました。

「それでは、わしと一緒にこれからお城まで行つてくれ。」

すると男はまたさう云ひました。そして不審さうなまた心

やうになつて了ひました。そこでお姫様は、色々心配なさつて、木の實を絞つた汁を飲ませて見たり、金の盃に受けた夜露を飲ませたり、いろ／＼手を盡して見ましたが少しもきゝめはありませんでした。籠の中の小鳥は、驚も目白も山雀も、皆申合せたやうに一聲も鳴きませんでした。それを見るとお姫様はますます悲しまれましたが、如何することも出来ませんでした。ところが誰かといふとなく、啞者の仙吉が小鳥の鳴き聲を真似ることが上手だから、それを呼んで見たらもしも小鳥が元のやうに鳴き出しはしないかといふことを申上りました。するとお姫様は、それなら直ぐ呼んで来るやうにといふので、その男が使に出たのでした。仙吉はその城が何處にあるといふことも、お姫様のことも少しも知りませんでした。可愛い小鳥のことだといふので、その家來と一緒に行くことにしました。やがて二人は森を出て、西の方へと仙吉はたゞその男に追いついて歩いて行きました。小一里も歩いた時でした。ふと仙吉が見ると、直ぐ目の前の丘の上には大きな立派な建物が聳えてゐました。

それが王様の城であることは云ふまでもありません。城は皆石で築かれた、見るからに堅固さうにがつしりとしてゐました。使の男は殿めしい鐵の門をつん／＼入つて行くので仙吉も恐る／＼追いて入りました。そして廣い庭を通つて二階のバルコニーへ上りました。

其處ではお姫様をはじめ大ぜいの家來達が、仙吉の來るのを待つて居ました。お姫様は使の男から仙吉の來たことを聞かれると大そう喜ばれて、どうかお前の力で小鳥達が鳴くやうにしておくれ、その變り褒美には何でも望み次第のものを與へると申されました。そして立派な金網の鳥籠の前に連れて行かれました。

仙吉が見ると、籠の中では自分の一番親しい友達である可愛らしい小鳥達が、皆な小さくなつて止り木の上に身をすほめて止つてゐました。それ等の小鳥には森の中にある小鳥のやうに、少しも元氣が無く、翼の色もすつかり汚れて垢くなつて居ました。それは廣い森と異つて、狭い籠の中では自由に飛び廻ることも出来ず、美しい池で水を浴びることも出来ないの自然と元氣もなく、次第に弱つて唄も忘れてしまふ

りだしました。其處では面白い音楽が賑やかに始められました。それを見られたお姫様に非常に喜ばれました。

「お前はほんとに不思議な力を持つて居るね。さア御褒美には何でもお前の望むものを上げるから欲しいものをいひなさい。」

お姫様は小鳥かものやうに鳴き出すと、仙吉にさう申されました。しかし仙吉は黙つて悲しさうな顔をして籠の中を見てゐました。

「何がいるの、お金かそれとも綺麗な着物か？」

お姫様がさう云はれても、仙吉は矢張り黙つて居ました。

「それではこの城の軍人にしてやらうか。」

それでも仙吉は頭を横に振りました。

「一體何が望みななの？」

さう云はれると始めて仙吉は、手紙似でその籠の中の小鳥がほしいといふことを言ひました。

それを聴かれるとお姫様は驚かれました。それは無理もありません。折角仙吉を呼んで來て鳴くやうになつたと喜んで居るその小鳥をやることは、今までの骨折が水の泡になつて

のでした。仙吉はその小鳥達を可哀さうに思ひながら籠の傍近く寄つて、先づ「オーホケキヨ」と驚の鳴き聲をその巧な口笛で吹きました。

すると籠の中の驚は、小さい首を傾けて仙吉の口笛を聴いて居ましたが、やがて靜に首を延ばし、柔らかい胸の毛を震はせながら同じ様に「オーホケキヨ」と鳴きました。籠の周圍にゐたお姫様や召使や家來達は皆な不思議さうに驚きの目を見張りながらそれを眺めてゐました。

やがてまた仙吉は、次には目白の鳴き聲を吹きました。すると矢張り目白も同じ様に仙吉の口笛に合して鳴きました。仙吉は次にカナ、ヤ、山雀と、その籠の中に居る小鳥の鳴き聲を順々に吹いて行きました。それを聴くと籠の中では、小鳥達は皆なめい／＼の唄を歌ふのでした。

「ビヨビヨビロロ、オーホケキヨ。」

仙吉がさう口笛を吹くと、小鳥は一齊に鳴きました。

「チロチロ、チチチ、ツビツビツビ。」

小鳥達は見る／＼元氣になつて、今までちつと止り木にうづくまつて居たのが、樂しさうに鳴きながら籠の中を飛び廻

しまふやうに思はれました。そしてもう大切にして飼つて樂しむことも出来なくなると思ふと、どうしていゝか解らなくなりしました。其處へ丁度王様が、あまりバルコニーが騒がしいのでどうしたのかと出ておいでになりましたので、お姫様はその事をお話になりました。すると王様は、

「それはやつておしまひなさい。仙吉が小鳥を鳴くやうにしたらその望むものを與へるといふ約束だから仕方がない。」と申されました。お姫様には大いなる小鳥なので惜しいとは思はれましたが、どうすることも出来ませんでした。

仙吉 王様の許しを得ると、その籠の戸を開けて小鳥を皆な出してしまひました。仙吉は別に小鳥が欲しかつたのではなく、狭い籠の中で窮屈な思ひをしてゐる小鳥達を可哀さうに思つたのでした。そして森の小鳥と同じやうに廣い自由な天地に放してやつたのでした。

小鳥達は籠を出ると、一層嬉しさうに鳴きながら庭の木の枝から枝へ飛び廻りました。仙吉は餘りに突飛な自分の行ひを驚いて見てゐる人達に一禮すると、高らかに口笛を吹きながら城の門を出て歸つて行きました。すると小鳥達も同じや



うに鳴きながら仙吉に追いつて飛んで行きました。

「ビヨビヨビヨロ、ホーホケキヨ」

「チロチロチチチ、ツビツビツビ」

小鳥の鳴き聲も仙吉の口笛も、楽しさうに野原の彼方へ響

いて行きました。

仙吉が森の方へ半里ばかりも歸つた時でした。道で向ふから来る一人の老人と逢ひました。そのお爺さんは丁度仙吉の前まで来ると仙吉を呼び止めました。仙吉がその口髭の胸までも垂れた白い着物を着た老人の姿を不思議に眺めて居るとお爺さんは次のやうなことを言ひました。

「仙吉、お前は平常から小鳥を可愛がる感心な子供ぢや。わしは鳥の國の王ぢやが、その心に愛で、お前の啞者を治してやの。」

お爺さんはさう云ひながら袂から一枚の木の葉を出して仙吉に與へました。

「お前はこれから森へ歸つたらこの葉で池の水を汲んで三度飲め。そしてその度に東に向つて神様を拜め。さうすると立派に人間の言葉が云へるやうになる。」

お爺さんの姿はさう云つてしまふと、掻き消す様に見えなくなりました。丁度その時です。堤の上で寝た仙吉の目が覺めたのは……………。

仙吉は不思議さうに四邊を見廻しました。しかしそこには白い着物のお爺さんの姿も見えず、お城もお姫様もなく、矢張り森の中の堤の上でした。太陽はもう大分傾いたらしく森の木の間から透かして見えました。そして小鳥達は仙吉が眠る前と同じやうに、枝から枝へ鳴きながら飛んでゐました。仙吉がふと見ると、自分の直ぐ傍には見馴れない一枚の大きな木の葉が落ちて居ました。

それはさつき鳥の國の王様であると云つたお爺さんからもらたのとおなじやうなものでした。

仙吉はお爺さんのいつた言葉を思出すと早速それを拾ひ、池の傍へ下りて三度水を汲んで飲み、教へられた通りに東に向つて心から神様を祈りました。

啞者の仙吉が啞者でなくなつたのは、其の時からです。仙吉は立派に人間の言葉を話す事が出来るやうになりました。そしてその口笛はますます上手になり、小鳥の仙吉の名は誰一人知らぬものは無いやうになりました。(をばり)

風

内藤豊雄

お前は風をゆり上げる
空へ小鳥を吹き上げる
草に裾を引きすつて

お前の通る音がする

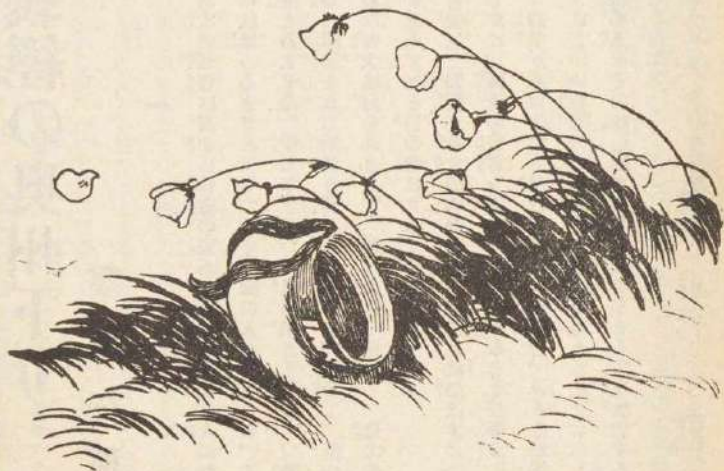
風よ風、お前は一日吹いてゐる、
風よ風、大きな聲で歌ふね、

お前はいろんな事をする
けれどいつも隠れてる



お前は僕にさはつたり
ないしよでどこかで僕を呼ぶ
風よ風、お前は一日吹いてゐる、
風よ風、大きな聲で歌ふね、

お前は強くつて冷いね
お前は若いか老人か
お前は野や木の 獣か
それとも僕より強い子か
風よ風、お前は一日吹いてゐる、
風よ風、大きな聲で歌ふね、
(メタイーファンソン)



義経の奥州下り(つゞき)

窪田 空穂



八人の強盗は夜中に長者の家へ押入りました。入つたところには誰も居ません。中へ入つて見たが、そこにも誰も居ません。變だと思つて奥の間まで入つて、働きの爲に障子を五六間切り倒しました。その物音で、酔つて寝てゐた吉次は目をさまして、刃ね起きて見ると、鬼のやうな男がぞろ／＼と目の前に立つてゐます。

吉次は、強盗が自分の物を取りに来たとは思はず、これはたしかに、源氏の若君を連れて奥州へ下ることが平家に分つて、討手が来たのだと思ひました。それで、みんなに逃げるやうにといふ相圖の貝を吹いて逃げ出しました。

遮那王もその時には目をさまして、そして吉次のすることを見ました。

「頼みにならないものは商人だ。侍ならそんな臆病なこと

はしまい。それはとにかく、京を出て、この籠の宿で、強盗の爲に死ぬといふのも因縁だ。」

さう覺悟をして、袴の上に腹巻(巻)をつけ、太刀を腰にさし、綾の小袖をかぶつて、眠てゐた間の障子からそつと出て、そこにあつた屏風を疊んでしまつて、強盗のこちらへ來るのを待つてゐました。

「吉次を見のがすな。」

強盗どもはさう喚いてこちらへ押寄せて來ました。屏風のかけに人が居ようと思はず、持つてゐた松明をさし向けると、そこに遮那王のゐるのを見ました。しかし強盗どもは、それを女だと思つて相手にせず、屏風で押包んで、そこを通り過ぎてしまひました。

「かう人らしくなく扱はれては残念だ。生きてゐる甲斐もない。後々になつて、義朝の子の牛若といふものは謀叛を起して奥州へ下る途中、籠の宿で強盗に逢つて、臆病にも命をのがれた。それが今太政大臣(清盛のこと)を殺さうと覗つてゐるなどと云はれるのは悲しい。とにかくのがれない命だ。」

遮那王はさう思ひました。思ふと一しよに腰の太刀を抜い

て、大勢の中へ走り込みました。

八人の者は、さつと二つに分れました。由利の太郎は、

「女かと思つたら、却々の者だつた。」

と云ひながら、一太刀で切つてしまはうとして打ち込んで來ました。身の丈が高いのに、太刀は長い、天井の縁へ太刀を打ち込んでしまつて、抜かうとして抜きかねてゐるところを、遮那王は隙かさす左の腕をふつと切り落してしまつて、返す太刀で首を打ち落してしまひました。

藤澤の入道はそれを見て、

「やあ、切つたな。そこ動くな。」

と大薙刀を振つて走りかゝつて來ました。遮那王は相手となつて切り合ひましたが、入道が柄のもとの方を持つて、すりと長く差し出すと、遮那王は相手の手元へ走り入つて、その柄を切りました。名高い刀なので、柄は切り落されしました。入道は太刀を抜かうとすると、抜ききれないうちに、兜の真中から頸へかけて二つに切つてしまひました。

吉次は物かけに隠れて、この有様を見てゐました。

「恐しい殿の手並だ。自分をどんなにが臆病だと思召すだら

と思ふと、それに勵されて、腹巻をつけ、太刀を抜いて、敵の捨てた松明を拾つて振りまはし、遮那王と一しよになつて戦ひました。三人はまたたく間に切り倒しましたが、二人は手傷をうけて逃げ、一人は追つても追ひつきませんでした。隣りの家に残つてゐた強盗は、驚いてみんな逃げてしまひました。

その翌朝です。鏡の宿の東はづれに、五つの首が晒されました。その側に立札がしてあつて、次ぎのやうに書いてありました。

音にも聞くらん、目にも見よ。出羽の國の住人由利の太郎、越後の國の住人藤澤入道以下の首、五人切りて通るものを、何者とか思ふらん。金商人三條の吉次が爲には、縁あり。これを十六にての初業よ。委しき旨を聞きたくは、鞍馬の東光坊が許に聞け。

承安二年二月四日

遮那王は、その日に鏡の宿を立ちました。吉次は一そう大事にして、下つて行きました。



までは、子供の髪に結つて、烏帽子を着けずゐたのが、髪を大人のやうに結ひかへて、烏帽子を着けだすのです。これは男に取つては大事な儀式です。それで、立派な人を頼んで

遮那王は、吉次と旅をつゞけて、尾張の熱田へ着きました。ここには、三種の神器の一つである草薙の劔が、明神として祀られてゐます。その社の神官の頭である大宮司は、源氏には縁の深い家です。それは、前の大宮司の娘は、義朝の妻となつて、頼朝を生みました。そしてその人は、今もこゝにゐます。今の大宮司は、前の大宮司の子だからです。

遮那王は、父の縁を思つて、大宮司に逢つて行かうとして、吉次を使として、そのことを申込みました。大宮司はよろこんで、急いで迎ひの者を出して、遮那王を自分の家へ案内しました。そして大事にあつかひました。遮那王は一と晩泊つて立たうとしたが、たつて留めるので、三日のあひだ逗留しました。

そのあひだのことです。或時遮那王は吉次に、「かうして、童であるのは工合が悪い。烏帽子を着て下らうと思ふが、何うだ。」と相談しました。烏帽子を着けるといふのは元服するといふことで、子供から一人前の男になるといふことです。それ

その儀式をしてもらひ、よい場所を選んですることになつてゐました。遮那王は、年は十六になつた、元服をするに早過ぎはしない。それに、こゝには大宮司がゐる熱田の明神がまします、すべてに都合がいゝと思つて云ひ出したのでした。

『それは、どのやうにもお心のまゝになさいまし。』と吉次は答へました。

遮那王は、大宮司に儀式をしてもらつて、元服して烏帽子を着けました。

元服をすると、名も替へることになつてゐました。

『元服はしたが、秀衡に逢つた時、名は何といふ』と聞かれて、遮那王といふといつたでは、男になつた甲斐がない。秀衡は我々には代々の家來だ。家來から名を附けてもらふやうなことがあつては恥だ。幸ひこゝは、熱田の明神の御前だ。それに兵衛佐殿(頼朝)の母上もゐられる。こゝで名を替へて行かう。

遮那王はさう云つて身を清めて明神にお詣りをしました。大宮司と吉次とがお供をしました。

明神を拜んだ後で、遮那王は二人の者に向つて、

「自分は左馬頭殿（義朝）には九番目の子である。今日からは左馬の九郎と云はう。實名は祖父爲義、父義朝、兄義平の義を取つて、義經と云はう。」
と云ひました。昨日までは遮那王であつたのが、今日は左馬の九郎義經になつたのである。

これをしまふと、義經は、奥州へ向つて熱田を立ちました。

三

義經は、駿河の浮島が原へ着きました。こゝには七番目の兄で、出家して、阿野の禪師と呼ばれる人が住んでゐました。義經は逢つて行かうと思つて、使をやらせ、禪師はよろこんで迎へました。

兄弟は逢ふと、両方であつと目を見詰め合つたまゝ暫くおりました。二人の目から涙がこぼれ出しました。

義經は、今、奥州へ下る途中だと話しました。その譯をも話しました。それを聞くと禪師は、

「別れた時はあなたはまだ二歳だつた。それから今日まで、何所にをられるとも知らずにゐたのは、かうした大人になられて、それ程の大事を思ひ立てられるといふのは嬉しいことだ。

私も一しよに行つて、生き死にも同じにしたいと思ふが、今はもう出家してゐる、弓矢を執るといふのも縁やかではない。それに、私でもしなければ、父の菩提も、一門の人々の菩提も申ふものはない、私はその方をしませう。」
さう云つて慰めました。それから又、

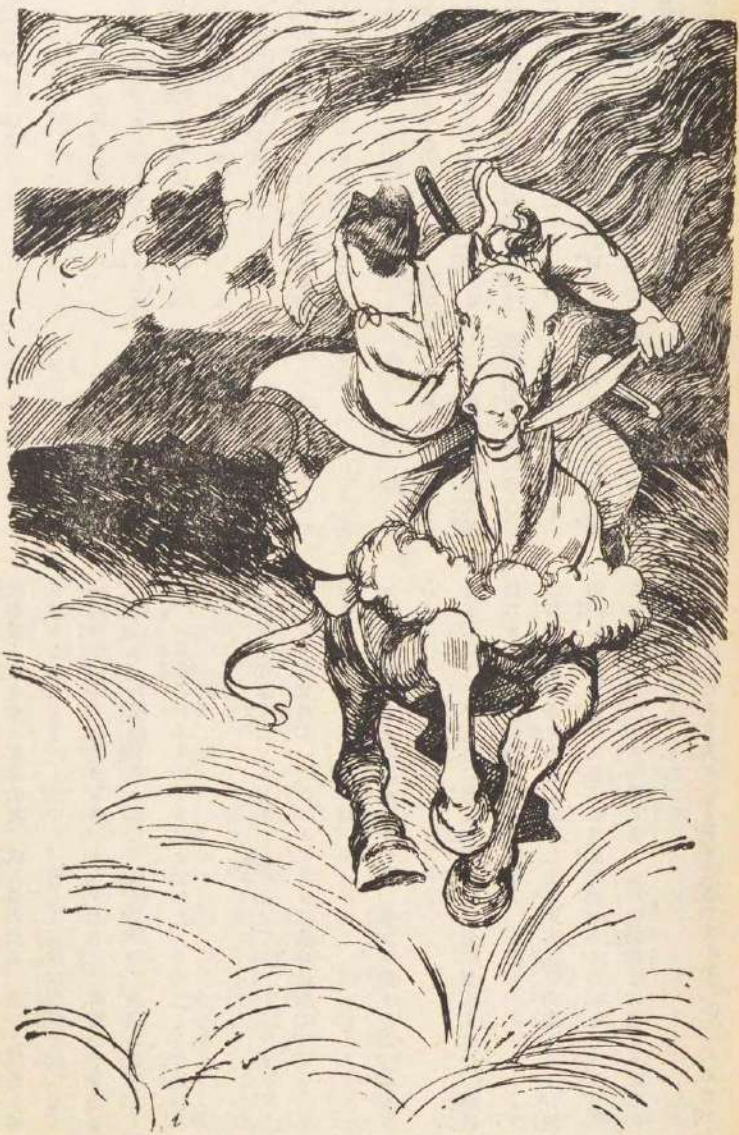
「兵衛佐殿（頼朝）も、伊豆の北條にゐるが、番が厳しいといふので、手紙さへやらすにゐる。近間にゐるといふのは合ひにしてゐるだけだ。あなたも逢ふわけには行くまい。手紙を書いておきなさい。いゝ折を見て届けて上げよう。」さう云つて力も附けました。

「かうして折角逢ひながら、一と月も一しよにゐることのできないといふのは悲しいことだ。」

禪師はさう云つて別れを惜しみました。義經は禪師に別れて、奥州へと向ひました。

四

義經は、足柄の山を越し、武藏野を過ぎて旅をつゞけました。一つの宿へ着いて泊つた夜でした。その夜は義經も、都から遠く来たことだと思つて、住み馴れた都のことをいろいろ



ろ思ひ出しました。

宿の主人を呼んで、義経は、

「こゝは何處だ。」と尋ねました。

「下野の國でございます。」と主人は答へました。

「こゝは小堀の庄ではないか。」

「下野の庄と申します。」

「この庄の領主は誰だ。」

「小納言信西と申される方の母方の伯父で、諸陵介と申される方があります。その方の子で、陵の兵衛といふ方でございます。」

主人のさういふのを聞くと、義経ははつきりと一つのことを思ひ出しました。義経が九歳の時でした。鞍馬寺の東光坊の側にゐますと、寺へお詣りに来て、師匠の東光坊に逢ひに來た一人の侍がありました。その侍が義経に目を着けて、東光坊に「幼いが、利かない目つきをして入らつしやる。何ういふ方の若君です。」とききました。東光坊が「これは左馬頭殿（義朝）の若君です。」と云ふと、侍は、後々は平家のために大事件だ。かうした方々を助けて日本に置くのは、

人の侍を握き寄せて、

「御主人に御案内を頼む。」と云ひました。

「何方から入らつしやいました。」と侍がきくと、

「京の方から來た。以前お目に懸つたことのあるもので。」と云ひました。

侍は主人にそのことを取次ぐと、陵は、

「何んな人だ。」とききました。

「尋常な方です。」

「では、此方へ御案内しろ。」と云つて、義経を座敷へ通しました。

陵は義経に逢つたが、顔はもう忘れてゐました。

「あなたは、何ういふ方ですか。」

「幼少の時お目に懸りましたが、お見忘れになりましたか。

鞍馬の東光坊で、用のある時には尋ねて來いとおつしやつたので、何もかもお願ひしようと思つて下つたのです。」

さう云はれると、陵は考へてしまひました。「大きくなつた子供たちは、京へ上つて小松殿（平重盛の邸）に仕へてる。今自分が源氏の身方をする、二人の子供は命を取られ

虎を野に放すやうなものだ。成人されたら、きつと謀叛を起されることだらう。」と云つた。そして侍は義経に向つて、「お耳に留めてお置きなさいまし。若し私に御用のできました時には、お尋ね下さいまし。私は下野の下道祖にをります。陵の兵衛といふものです。」と云つた、そのことを今思ひ出したのでした。

「遙々奥州まで行くよりも、陵のところへ行つて頼んだ方がいゝかも知れない。行つて見よう。」義経は腹の中でさう思ひました。そして吉次には、

「自分はちよつと尋ねる人がある。後から直ぐに追つ着くから。」

と云つて、不安心に思ふ吉次を先へ立たせてしまひ、義経はたゞ一人で陵の家へ行きました。

外から様子を見ると、いかにも名ある侍の家らしく、門の外には鞍を置いて直ぐにも駈け出せるやうにした馬がどつさりゐます。門の内を見ると、侍の詰所には五十人ほどの侍が詰めてゐました。

「これならば大丈夫だ。」と義経は思つたので、そこにあるたてしまふ。これは出來ないことだ。と思つたので、

「さうお思ひ立ちになりましたならば、お身方はいたしませうが、しかし、平治の亂の時に、御兄弟皆様、お命のなかつたのを、お母上のお力でお助りになつたのですから、その邊の御遠慮もあるべきだと存じます。それに又、齋命のことは分りませんが、清盛はもう年寄です。清盛がなくなりました後で、お思ひ立ちになりました方が宜しうございませう。」と云ひますと、義経は、腹の中で、

「此奴は、日本一の臆病者だ。何うかして呉れたい。」と思ひましたが、向うは大勢、こちらは一人で、何うすることも出來ません。それで、黙つて、その日を暮しました。

その日の夜半でした。頼まないからには、かばつてやることもない。」と思つて、義経は陵の家へ火を附けました。邸は何處も残らずに焼けてしまつたと見ると、義経はす早く逃げ出しました。

往還を逃けては擱まへられるかも知れないと思つたので、義経は態と踏のない隅田川の岸を逃げました。乗つてゐる馬の足を早くさせて、二日かゝる道を一日で駈けさせて、上野の板鼻といふ所へ出ました。(つづく)

籠の瓜がなくなる話

田中 實



むかし、大和の國のあるお百姓が、眞桑瓜を京都へ持つていつて、どつさりお金を儲けやうと思ひました。

そこで、馬三頭に籠を二つつつ負せて、そのなかへ眞桑瓜を一ぱいになるほど入れました。そして、それを二人の人夫に譲らせて、京都へ運ばせました。

そのときは、七月の暑い眞盛りでしたから、人夫たちは閉口してしまつてやすみく行ききました。

ちやうど宇治の「成らの柿の木」といふ、そのころ名高かつた大木のそばまで来たとき、人夫たちは涼しさうな木かげに入つてやすみました。馬もヒン／＼といつて、汗をだかく出してゐましたから、籠をおろして、やすませてやりました。

人夫たちはたちまちに瓜が成つたので、目をまるくしてびつくりしてゐました。

おちいさんはその瓜をとつて食べました。さうして、

『お、おいしい。なか／＼おいしい。』といつて、いくつも／＼食べました。

そして、人夫たちも食べたさうにしてゐるので、惜しげもなくわけてやりました。まだそれでも食べきれないので、わざわざ通る人なよんで食べさせましたので、たうとうたくさん瓜を、一つも残さないやうに食べつくしてしまひました。すると、おちいさんは、人夫たちには口もきかないで、またとぼ／＼といつてしまひま



人夫たちは、「あ、暑い／＼！」といひながら、手拭で汗を拭いてゐましたが、「二つ内股で喰べてやれ。」といつて持つて来た、籠のなかの瓜をとり出して、おいしさうに食べはじめました。

それからいろ／＼なはなしをしてゐましたが、そこへ、ぼろ／＼の清物をきた一人のおちいさんが杖をついてとぼ／＼と来ました。

おちいさんは弱りきつたやうな聲をして、「わたしはもう、三日もご飯を食へないので、お腹がペコ／＼です。どうぞなにかおめぐみ下さい。」といひました。

人夫たちはそれをきくと、めい／＼に、「うるさいー」とどなつて、相手にしないでゐました。

するとおちいさんはまた、「そこににおいしさうな瓜がおりのやうです。もしおちいさんでございしたら、おめぐ

み下さい。」といひました。でも人夫たちは、やはり知らぬ顔をしてはなしをしてゐました。

おちいさんは、人夫たちが返事をしてくれないので、しよげて考へてゐましたが、「あゝあ、情けない人たちだれ。老人をあはれに思はないものは、きつと罰があたるよ。おまへさんたちがくれないのなら、もうわしほいらぬ。しかしわしは、自分で作つて食べるから……」といひました。

するといまで知らぬ顔をしてゐた人夫たちがそのとき、急におちいさんの方を見て、「何だい……」と、不思議さうにききました。

おちいさんはそこに散ばつてゐる瓜の種子を拾ひ集めて、杖で土を掘つて土をならし、その種子を植ゑて土をかけてをきました。

しばらくすると、聞もなく、芽が生えて、二葉ができましたが、その二葉がすん／＼大きくなつていつて、見るまに蔓を作り、葉つばができました。

そして、花が美しく咲きました。その花が落ちると、さもおいしさうな瓜が、いくつもいくつもその蔓に成りました。

人夫たちはあつげにとられて、ぼんやり見てゐましたが、

『さあ行かう。』といつて、立上つて籠の中を見ますと、いままで一ぱいまつてゐた瓜が一つのこらずなくなつてゐました。

人夫たちはまた／＼びつくりしてまへの蔓を見ますと、もうそのときはいまのいまでほんたうに生きてゐた蔓が、あとかたもなくなつてゐて、そこにはきたらしい蔓が突き立ててありました。

人夫たちはまつ着になつておこり出しました。そしておちいさんのあとをすぐ追かけましたが、いくらいつてもいくらいつても、おちいさんのすがたは見えませんでした。

通る人は笑ひました。だれもみなおちいさんがんなさけ知らずの人夫たちを戒めたといふことがよくわかつたからです。

人夫たちは、大和へ空つぼの籠を馬に負せて、またす／＼と歸つてゆかねばなりません。

人夫たちは、ひどく叱られるに違ひありません。(なほり)

泣きく天使

秋庭俊彦

三二



天使は夜になつてから或る都の空へ着きました。町々には青や、赤や、黄金色の灯が、寶石のやうにきら／＼と輝いて、方々の劇場に音楽が聞えたり、料理屋に宴會があつたりして人々が楽しさうに夜を更かしてをりました。平和の天使には、この賑やかな都の有様が嬉しくつてなりません。天使は星のか／＼やく空からしづかに或る町中へ下りました。天使の姿は人には見えないので、誰れも氣のつくものはありませんでした。

その晩、天使は夜の更けるまで大通りを歩いて見たり、家の窓から中を覗いて行つたりして、時間を過しました。やがて真夜中になつて、町々がさびしく寝しづまつてから、自分の休み場所を見つけるために、その都の大きな教會堂の方へ歩いて行きました。

その途中、天使は大きな門のある警察署の前で一人のお爺さんに出會ひました。お爺さんはどうしたのか往來へべつたりと坐つて、苦しさにハア／＼息を切らしてをりました。天使は急に若い女に姿をかへて お爺さんの傍へ近づきました。

「お爺さん、あなた何處か負傷でもしたんですか。」とき、まずと、お爺さんは弱々しい聲を出して、

「私は病氣で苦しんでゐる貧乏な年寄りでございます。けふ町の慈善病院へ入れてもらひに行きましたら、お前のやうに汚らしい乞食のやうな者は、町の役所の許しがなければ入れる譯には行かないと云ひますので、やうやく今此處まで来て、警察署へお助けを願ひに出たのでございます。ところが署長さんに嘔鳴りつけられて、追ひ出されたのでございます。私はもう死にさうでございます。」とお爺さんはハア／＼云ひながら話しました。

「お爺さん、それなら私がもう一度署長さんにお願ひして見てあげませう。」と天使は云ひました。

天使はお爺さんの手をひいて、警察署へ入りました。そし

て受附にたのんで署長さんに會はせて貰ひました。

「署長様、私は通りがかりの者でございますが、このお爺さんは大そう病氣で弱つてゐますから、あなたのお助けで慈善病院へ入れてあげて下さいませんか。」と天使は署長さんに云ひました。

眼の恐い黒い、髭をはやしした署長さんは、腹立たしさうな顔付をして、

「この爺さんはさつき追ひ出してやつたのに、お前は同でそんな餘計な世話をやいて連れて来たんだ。こんな毒障した病人なんぞ俺が知るものか。さつさと連れて出て行くがよい。」と嘔鳴りました。

「でも署長さん、あなたは町の人達を助けて世話するのが役目でございます。」と天使が云ひますと、署長さんはかつと怒つて、

「この女、何、生意氣ぬかす！ 爺さんを連れて出て行け。

おい、爺さん、さつさと出て行かないか。」と云ひながら、力の強い手でお爺さんをつき飛ばしました。病人のお爺さんはよろ／＼と天使の腕に倒れかかりました。

三三

天使は病人のお爺さんが可哀相でなりませんでした。こんな無慈悲な有様を一度も見たことのない天使は、思はず目に涙を溜めながら、

「署長さん、そんなひどい事をするものぢやありませんわ。」と云ひながら、署長さんの手を抑へました。

その時、天使の目からあふれ落ちた涙が、はら／＼と署長さんの胸のところへかゝりました。すると、急に不思議なことが起りました。今まで大きな聲を出して威張つてゐた署長さんが、見る／＼中に頭髮が白くなり、顔が皸だらけになつて腰の曲つたよほ／＼の、お爺さんになつてしまひました。そしてその上、喘息病みになつて、苦しうに息を切らしはじめました。

「署長さん、今度は自分が病氣のお爺さんになつて、苦しい思ひをなさるんですよ。さうすれば他人の苦しい心持ちがお分りになるでせう。」と天使は云ひました。そしてお爺さん連れて警察署を出て行きました。

それから今度は慈善病院の役人のところを起して、病人のお爺さんを助けて上げて下さいと頼みました。役人は眠いと天使は下界へ行つたら、普通の家の娘のやうになつて、都の人達といつしよに面白をかしく暮らすつもりでゐたのですが、下界へ来て見ると直ぐに、戦争のあつた荒野や、都の人の無慈悲な有様に會つたので、いつか自分のことは忘れてしまつて、下界の人々のことを可哀相に思ひながら、明日から方々の家を見廻つて、この都の中の氣の毒な人達を慰めたり助けたりしなければならぬと考へました。それが神様から命じられた自分の役目だとはつきり覺りました。

二

天使は教會の鐘撞堂を自分の休み場所にきめて、翌日から都の町々を見まはりに出掛けました。

天使は家々の屋根のあたりをしづかに飛びまはつて、窓から中を覗いて行きました。立派な花園のある廣い屋敷町、日の當らない、汚らしい長屋町、商店のつゞいてゐる大通り、ごた／＼して狭苦しい裏町と云つた風に、それから夫れへと見て行きました。初めの間は何處にどんな人がゐるのか、誰れがどんな暮らしをしてゐるのか分りませんが、方々の町をぐる／＼廻つてゐる中に、何處へ行つても、楽しい暮

ころを起されたので、大そう腹を立て、
「また来たのか、うるさい爺さんだ。お前見たいに乞食のやうな者の入る場所はないつて、あんなに云つたぢやないか。歸れ／＼。」と云ひました。それを聞くと、天使は又悲しくなつて、病氣のお爺さんのために泣きました。その涙が役人の膝のところへはら／＼とかゝりました。すると、その役人は見る／＼中に、腰が曲つて、よほ／＼のお爺さんになりました。そして急にやさしい聲で、
「さあ／＼お爺さん、こつちへお出で。お前さん苦しうだね。私が病室へ連れてつて上げるよ。」とお爺さんの手をとつて親切に云ひました。

天使はそれを見ると、嬉しうな笑ひ顔をしながら、二人のお爺さんに別れて、病院の門を出ました。そして教會堂の方へ飛んで行きながら、
「あ、私は下界は面白い、楽しいところと思つて来たのに何と云ふ悲しいことに會ふのだらう。神様が仰しやつたやうに、下界にはまだ／＼どんなに澤山辛いことや悲しいことがあるのかも知れない。」と思ひました。

しをしてゐる人が少くつて、不仕合せな氣の毒な人の澤山ゐることが、天使にはだん／＼分つて來ました。

汚らしい長屋にゐる、汚らしい人々の家でも、家中が仲善く、楽しくしてゐるところもあれば、綺麗な花園のある立派な屋敷の人達でも、夫婦喧嘩をしたり、親子で敵同士のやうに仲悪くしてゐたりするところもあり、兄弟で親の財産の取りつこをしてゐる家もあれば、親切な姉妹が自分の着物や食べ物まで減らして、両親を養つてゐる家もありました。天使は町々を廻りながら、一家仲善く暮らしてゐる人達や、お互に親切にし合つてゐる姉妹を見ると、その家の屋根に立つて、大空の方を見上げながら、その人達が一生涯楽しく暮らせるやうに、平和の神様にお祈りをするのでした。すると、その家の人達は、自分達が知らない間に、尙と心持ちが親切にやさしくなり、正直になつて、自分の家の樂しさを、神様のお恵みだと思ふやうになるのでした。金持ちで立派な屋敷に住んでゐながら、夫婦喧嘩をしたり、親子兄弟で財産の取りこをしたりしてゐる仲の悪い人達を見ると、天使はさう云ふ家の人が可哀相になつて、その家の屋根に立つて、はら／＼と

涙をこぼして泣きました。するとその家の人は、自分達の知らない間に、夫婦とも病氣になつたり、親子がひどい怪我をしたり、兄弟が途中で何か災難に出會つたりして、家中の者が急に悲しい、心細い氣持ちになつてしまふのでした。そして始めて自分達の不親切な、悪い行ひに氣がついて、お互に慰め合ふやうになるのでした。

かうした天使は、或る處ではまた、主人が酒飲みのために家中が貧乏をして困つてゐる人に出會ひました。天使はその家の屋根に立つて、涙をこぼして泣きました。すると、その主人は、急にふら／＼と中風病みのやうになり、これまで酔つぱらつて許りゐたことを後悔して、

「あ、私は仕事をなまけてお酒ばかり飲んでゐたゝめに、何だか恐ろしい病氣になつたやうだ。私はもう決してお酒を飲まないから、今までの事を勘辨しておくれ。」と家のものに云ひました。

或る處ではまた、大きな工場に働いてゐる澤山の職工が、その吝嗇な主人に、安い賃金で夜まで仕事をさせられて苦しめられてゐるのを怨んで、折があつたら主人をひどい目に會

せてやらうと相談してゐるのに出會ひました。それを聞くと天使はその主人の家の屋根へ行つて、はら／＼と涙をこぼして泣きました。すると、その主人は見る／＼の中に、半分氣狂ひになつて、倉から山のやうに札束を持ち出して、職工の大勢集まつてゐる處へ駈け出して行きました。そして其處あたりへ札をばら／＼撒きちらして、

「あ、私はお金を慾ばつたために今迄みんなに鬼のやうに憎まれてゐた。私はいつみんなに殺されるかも知れないと思つて、夜も安心して寝たことがない。もう私は吝嗇はしないから、どうか私を憎まないでくれ、今夜から安心して寝られるやうに許してくれ。あ、お金なんか幾ら貯つても、みんなに憎まれては恐ろしい。」と職工達にあやまりました。

また或る處では、乞食のやうなほろ／＼な風をして、貧乏で食べる物もろくに食べずに、屋根裏の汚ない部屋で一生懸命に本を書いてゐる學者に出會ひました。天使は窓からその容子を眺めて、その學者の貧乏な姿を可哀相に思ひながら、何だか友達にでも會つたやうに懐かしくなつて、急に窓からそつと部屋の中へ入りました。そして美しい少女の姿になつ



て學者の前に立ちました。

すると學者はびつくりして、「あゝ、あなたは誰れです。」と云ひながら、勉強のために瘦せた、青白い顔をあげました。「私は下界を見まはりに来た天使です。あなたは何を書いてゐらつしやるの。」と天使はきゝました。

「私は世の中の人達が、みんな優しい、親切な心持ちになつて、平和に、仕合せに暮らすやうに、その教へを書いてゐるのです。」と學者は答へました。

「では、あなたも私と同じやうに、この都の人達の事を悲しく思つてゐらつしやるの。」

「さうです。そして大勢の不仕合せな人達の暮らし方を、どうかして善くしてやりたいと思つてゐるのです。」

天使はそれをきくと、學者の頭の上に十字を切つて、

「あゝ、あなたは何て貴い方です。私は下界へ来てから、あなたのやうな人に會つて、初めて心が晴れぐゝとしました、私は何處へ行つても不仕合せな人達が澤山ゐるのを見て、今まで泣いてばかりましたの。」と天使は云ひました。

「でも、あなたのこぼした涙は、知らず識らずの中にどんな

に人の心を美しく優しくするでせう。これからも不仕合せな人達に會つたら、可哀相に思つて泣いて下さい。こんな下界では、あなたのやうに、他人の不仕合せを可哀相に思つて泣いてくれる人が誰れよりも大事なんです。」と學者は云ひました。

天使は學者の云つたことを嬉しく思つて、背中の翼から小さい羽を一本ぬいて、それを學者に渡しながら、

「これを私の記念に上げますから、ペンにして使つて下さい、そして時々私のことを思ひ出して、

下界へおられた平和の天使、

町から町へ

泣き泣き天使。

と歌つて下さい。さうしたら私はその歌をきゝつけて、あなたの處へ休みに來ます。」と天使は云ひました。

そして美しい少女の姿をかき消して、窓からそつと出て行きました。また家々を見まはりに行つたのでせう。(なほり)

幼年詩 私のふで

ばこ (推薦)

山口縣御井小學校 琴二

松本幸枝

わたくしの

ふではこのふたを

あけてみると

なかには

なんにもないので

いろえんびつを

いれました



◆童謡

野口雨情選

硝子の國

神戸市 水戸孝道

硝子に ほつちり
泡つ粒
小なお家に
小人達が 動いてる
小さな世界が

蛙の木登り

群馬縣 青柳花明

お寺のお庭の 櫻の木
蛙が木登り やつてゐた
蛙の 蛙の ものすきさん
どこまで登つて
どこで見ると

鳥

東京府 作間 博

上野の森の 杉の木で
かつこかつこ 鳥が啼いた
親なし 宿なし
上野の鳥
赤い夕日を見て啼いた

夕風の歌

舞鶴港 奥田銀之介

夕風寒いよ
お家へ歸ろ
トン／＼ トン／＼
駆け／＼ 歸ろ

お日さま

名古屋 神谷二三子

東のお山に お日さまたてば
町の工場の笛が鳴る
西のお山に お日さまたてば
お寺の淋しい鐘が鳴る

鳥のお灸

東京市 大橋みつる



人櫻ひ (入選)

長野縣下伊那郡飯田小學校

水野戒三

三郎さんは今年五歳になりました。五歳であります。毎日泣いてばかりをります。そして毎日ぐさる種をこしらへてばかりをります。
ある日のこと、いつものやうに無理なことをいつて泣いてをりました。兄さんも姉さんも、「三郎には手がだせん。」といふぐらゐです。もうだれもだましてくれる人がありません。「わあ、わあ、わあ。」と大きな聲を出します。そのうちに涙も聲も出んやうになりました。またそのうちに、思ひついたやうに「わあ、わあ、わあ。」と無理に泣きます。そのうちに三郎さんは眠くなつて寝てしまひました。
三郎さんが寝てゐますと、誰れか窓をコツコツと叩きました。三郎さんはびつくりして聲も出ません。そのうちに支那人らしい悪人は窓をこはして三郎さんの寝てゐる部屋へ入つて來ました。そして三郎さんを横に抱へて窓から外へ出ようとしてました。
三郎さんは「嫌だ、嫌だ、いかんわ、いかんわ。」と叫びましたが、誰も返事がありません。

もうそのときは、窓から外へ出てをりました。支那人は三郎さんを横に抱へたまゝどん／＼走り出しました。三郎さんは「嫌だ、嫌だ、ゆるして、ゆるして。」と叫びました。
支那人はかまはずどん／＼走り、自動車へ三郎さんを乗せました。自動車の中にはもう一人の支那人が乗つてをりました。
その支那人はもう一人の支那人に「うまいくつたか」と聞いて、三郎さんの顔を見ました。
「うまいくつたさ。」などと話してをります。三郎さんは眠気がさして來て、うとうとと眠りはじめました。
少したつて三郎さんは眠を開いて見ますと、驚きました。三郎さん びつくりして眼をぎよろぎよろさして、四方を見つめると、舟の中へつれて來られてゐました。「恐い恐い。ゆるして、ゆるして。」と、叫びました。
支那人は「だめある、だめある。いくら泣いてもだめある。」と、いつてゐます。そして二人で、
「こいつ持つていく、親分からいくらくくれるある。」
「うまくやつたあるな。」などと話してゐます。
三郎さんは恐くなつてぶる／＼震へてゐました。そしてお父さんのことやお母さんのことを考へて、またおい／＼泣き出しました。そのうちにいつものやうに、

烏カラスのオヤジさん
おヤジおクレれ
いたづらら子こ供どもに
すゑてやる
烏カラスのオヤジさん
おヤジおクレれ

山の唄海の唄

茨城縣 内田みわ路

山の唄 歌はう
海の唄 歌はう
この子も 歌へ
あの子も 歌へ
みんな 歌はう

お話

青森市 山田積重

ばあさん どうぞ
むかし話を聞かしてよ
不思議な話を
聞かしてよ

蝶

栃木縣 福田延太郎

白しろいく蝶ちょう々々
天あまの御み殿どのが金かねに光ひかりる
おめめがさめましたか

風

津市 伊藤 治

風かぜよ 吹ふけ 吹ふけ
僕ぼくの風かぜ吹ふきあけよ
一番いちばん上うへへ吹ふきあけよ

かんがらす

愛知縣 榊原 一直

首くびをまけて かんがらす
寒さむかつた 寒さむかつた
今いまのさつきを考かんがへた
こはかつた こはかつた

子守歌

横濱市 松野 一郎

ちだんだを踏ふんで舟ふねのなかを暴あやれ廻まわりました。
支那人しなじんは「こいつかんしばり上げよ。」といつて、細引こいひで三郎さぶろうさんの手ても足あしも縛しばり
つてしまひました。



三郎さぶろうさんは恐おそいやら悲かなしいやらで、大おほきな聲こゑで泣なき叫こゑびました。
また支那人しなじんは「やかましや、やかまし、口くちも縛しばるある。」といつて、口くちも堅かたく縛しばり
つてしまひました。
三郎さぶろうさんは手ても足あしも口くちも縛しばられて、どうすることも出来でません。そのうちに泣な
きながら眠ねつてしまひました。
しばらくすると、様よう子が逃にげたやうな氣きがしましたから、眼まなこを開ひらいて見みますと、
ここは親おや分の住すまいで、髻むすのむしやくしやに生なえたそれは恐おそい、鬼おにのやうな顔かほを
した男おとこが、腰こしを掛かけてゐました。
これを見みた三郎さぶろうさんは、もうなんともいへなくなつて、たゞがたく震ふるへてゐ
るだけでありました。
恐おそい男おとこは三郎さぶろうさんに向むかひ、
「おい！ お前は日本人にほんじん三郎さぶろう泣な蟲むしか。今日けふお前まへををこゝへ攫さらつて來たのは、お前まへ
があまり泣なくから朝鮮ちやうせんの泣な男おとこに賣うつてしまはうと思おもふある。どうだ、その方なたがい
いだらう。」と、雷かみなり様のやうな大おほきな聲こゑで嗷うな鳴なりました。
三郎さぶろうさんは正氣せいぎに返かへつたやうに、急いそぎに、
「嫌いやだ。ゆるして小父おやさん。ゆるして下さい。」と泣なきながらいひました。
恐おそい男おとこは「なにぐづくいふか。ゆるしてもなにもありやせん。ぐづくぬか
すと承知しやうちせんある。」としかりました。

坊やはい、子だねんねしな
圓い ののさん出たほどに
赤い 人形も寝たほどに
坊やは いい子だねんねしな

鶯の歌

福島縣 高木 一夫

わたしの歌を
どの子に聞かそと 鶯が
ホケキョ〜と
啼いてゐた

狐火

東京市 藤井 由春

廣い野原は 眞暗ぢや
チラ〜見えるは
狐の火
サラ〜芒に風吹いて
コン〜 狐の聲遠し

お山の小兎

京都市 前田 脩

お山の小兎 なぜ目が赤い
父さん死んで一晩泣いた
母さん死んで二晩泣いた
それで目が赤い

洪水

京城 池田 香珠夫

洪水ちや 洪水ちや
鼠が一匹流された
溝の中の 子鼠が
溝の中で 流された

たんぼほの種

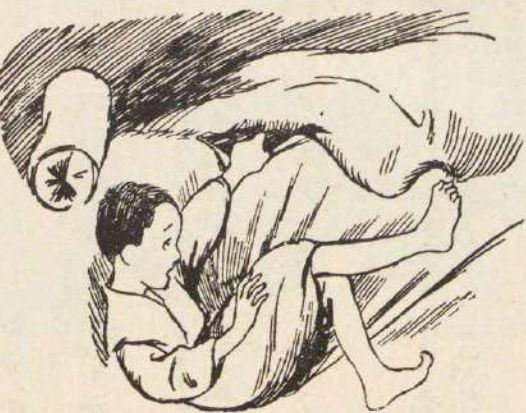
東京市 北田 はつ子

たんぼほさん たんぼほさん
今はいつたい 何時でせう
種が二アつ もう二時ね
それでは お家へ
歸りませう

三郎さんは小さくなつて、「小父さん、僕はもう泣かん、きつと泣かん、ゆるして頂戴」と、可愛い、頭を幾度も下げました。

だが親分は「まだぐづ〜いふか。ひどいある。それ天井へ釣るせ。」と命令しました。

そばにをつた者はすぐ、三郎さんを縄でくくり、機械のやうにきゆうと天井へ釣るしてしまひました。そして下から竹の棒で、三郎さんを横から突いたり、たてから突いたり、左から突いたり、右から玉を突くやうに突かれました。



三郎さんは「ゆるして、いたい、いたい、もう泣かん。」と、ありつたけの聲を出してさげびました。たちまちずどんと落ちました。

「わあ〜、もう泣かん、無理もいはん。」となきました。

この聲にお母さんは、

「まあお前、寢臺から落ちてどうしたのです。」といひましたが、三郎さんには悪い男と見えました。そして、

「もう泣きません。無理もいひません。ゆるして下さい。縄を取つて下さい」と、一生懸命でいひました。

お母さんは何をいふのだと思ひ、「お母さんです。お母さんです。どうしたのですか？」とやさしくお聞きになりました。

すると三郎さんは、のついたやうに「あ、夢だつたんだ。僕は悪い夢を見た。」とお母さんにこのことを話しました。

お母さんも「あ、夢でよかつた。ほんとに支那人に凌はれて朝鮮の泣男なんかに賣られては、ほんとにお母さんも悲しい。兄さんだつて悲しいし、姉さんもお父さんも悲しがるでせう。もう泣いてはいけませんよ。きつと神様が罰をおあてになつたんだ。しかしまあほんとの罰でなかつたよかつた。」とお母さんもさうおいひになりました。

三郎さんはその次ぎの日からは、少しも無理をいはずに、やたらに泣かんやうになりました。そしてお懶巧で幼稚園へお友達と通ふやうになりました。(をばり)



傳 小豆洗ひの話

藤澤衛彦

昔々、天慶の亂(平將門の亂)の頃、玉造小町様といふ人の下婢の幡少女が、今の茨城縣久慈郡瑞龍村の七井の泉で、一所懸命にお米を磨いでなりましたところが、何處からか白い矢が飛んで来て、少女の胸を射貫いて行きました。少女は、そのまゝぱたり倒れて死にましたが、倒れる拍子に、磨きかけのお米を泉の中に落しました。丁度その頃、御主人の小町様は、お居間でお歌をお清書中でしたが、突然、香もなく色紙の上に落ちた物がありますので、はつと思つてそれをよく見ますと、血に染まつた一筋の白粉の矢でありました。それで、何となく

幡少女の事が案じられて来ましたので、急いで七井の泉へ行つて見ますと、可哀さうな少女が倒れてをります。小町様は、大層それを悲しまれましたが、死んだ人の魂を呼び戻す事も出来ませんが、手厚くお葬式をすませ少女の故郷の同じ郡の幡村の野原の中に塚を築いて懸るに申ひました。

それにもかゝらず、毎年少女の死んだ夏の頃になると、きつと、日な限つて、七井の泉の水が眞白に變るといふ不思議が起りました。それは、其日になると、幡少女が、思ひ出して、昔磨きかけのお米を磨ぎに来るからだと土地の人達は言ひ傳へましたが、小町様も、その少女の執念を、どうしてやる事も出来ず此世を去られました。その迷ひで、小町様も、春先になると、色紙や短冊を持つてよく其處此處に現はれ出るといふ事でごさいました。それから百年も千年もたりました。この

が、水戸黄門様の御領分になつた後まで、さうした不思議は止みませんでした。或時、光圀公(黄門様)がお忍びで旌徳寺の欄を御見物においでになつた事がございまして、とある花の下でお酒をめしあがつてなられますと、つと太古の風俗をした美しいお姫様が、何處からともなく其處の欄のところへ来て、短冊を枝に繋いで行きますので、立寄つて見ますと、

姫がなかに旌野の欄唐衣

きて見る人の袖はいろく、書いてありましたので、御家來の一人を急がして、其お姫様のあとを尾行させました。ところがやがて戻つて来ました御家來が、
「あの姫君は、身置山の、ある古墳のあたりで姿を消してござります。と申しましたので、光圀公が行つて御覽になりますと、それは、文字も無い古塔で、村の人々の小町様の墓と申し傳へてあるものだといふ事がわかりました。
その頃、又、この古塔の邊に、山寺がございしましたが、この寺に、まことに賢い小町主がなりました。ところが、小町主が、

頃しきりに噂される小町様の傳説や、幡少女の哀れな傳説を聞きまして、どうかしてその人達の死後の迷ひを慰めてやりたいと思つてなりました。

すると、間もなく、例の幡少女の命日が廻つて来て、今日に七井の泉の水が白く濁ると



ので、氣の毒になつて、小町主は、つい手を借してやつて、そのお米を磨きあげてやりました。
すると、少女は、大變に喜んで、丁寧にお禮を言ひました。
「お蔭様で、二度と此處にお米を磨ぎに来る

いふ日になりました。その朝早く、小町主が七井の泉を尋ねますと、お話に聞いた昔姿のまま、少女の亡靈は、サグ／＼と熱心にお米を磨いでるやうでしたが、力が足りないかして、なか／＼磨ききれないやうな

世話もなくなりました。ほんとにありがたうございしました。このお禮には、何でも直と數へられるやうにおなりですわ。このお米の粒でも、幾つあるか、もうおわかりでせう。」
といふ言葉の下から、小町主には、それが不

思議に判るやうに思はれました。それで、其に、向山の杉の木は慶本あるだらうかと、其思つた數を本當の計算に合はせてみますと、其つたり合ひますので、それから、よく、物の數を言ひ當て、村の人達を驚かせました。或時、和尚さんが、小町主に小豆を洗はせにやつて、歸つて来た時何氣なく、
「この小豆は幾粒あるだらうか。」と尋ねましたところが、「はい、幾粒です。」と本當の數を空で、答へましたので、調べて見たところが、その通りでした。和尚さんは、末恐ろしく思つて、翌日また小豆を磨がしにやり、隙を見計つて、小豆ぐるみ小町主を井戸の中に突き落して殺してしまひました。
すると、其後は、毎晩、その刻限になると井戸の邊で、小豆を洗ふ音がして、
「小豆洗をかん取つて喉をか、サグ／＼／＼」と、かすかに小町主の呪ひ聲が物凄く聞えるやうになりました。
その噂が段々高くなつたので、しまひには、此寺に尋ねて来る人もなくなり、たうとう廢寺になつてしまつたといふことでござい



笛

光史田霜

くなる位でした。

その山は村の東の方にありますので、朝は中々村に陽が差して来ません。然し夕方はいつも眞赤に光つて、尖つた岩などは赤鬼が大きな口を開いてゐるやうでした、それで子供がだだを捏ねたり、悪戯をしたりするとよくお祖母さんは、「従順しくないや天狗山の赤鬼に喰はれてしまふよ。」と申しました。さう云はれるとどんな意地悪な子供でも急に従順しくなつてしまふのでした。

また、祖母さん達はこんな話もして聞かせました。

雪の降つてゐる時、天狗山から風が吹いて来ると必ず村に災難が起る。天狗風といふその風を胸の中へ吸ひ込んだ人は何時の間にか天狗山に連れ込まれて、天狗に喰はれてしまふといふのでした。

頓吉はその村でも貧乏な家の子供でしたが、心の眞直ない子でした。その妹の花子も兄と同じやうなやさしい子でした、二人は父母によく孝行をしました。そして仲よく遊んでゐました。

頓吉は毎日お師匠さんのところへ手習に行つてゐましたが

昔、ある國の山奥に天狗山といふのがありました。麓の村の人達はその山を大層怖がつて誰一人として足を踏み入れた人がありません。それもその筈、その山には天狗を始めとして種々な魔物がゐるといふ評判でしたから、子供達は夕方になつてその山の黒い大きな姿を見るだけでも何んか恐ろし

大變覚えがよく勉強するのでお師匠様のお氣に入りででした。そしてどんな雨の日も雪の日も一日も休んだことがありません。雪の降る日などは流石にお母さんは心配して、「頓吉や、お前勉強するのもしゃけれど、若し天狗風にでも吹かれたら大變だから今日は一日休んだらどうですね。」と云ひました。

すると頓吉は如何にも元氣に、

「お母さん、そんな馬鹿なことがあるものですか。それは迷信といふものだつて、此間お師匠さんが教へて呉れましたよ。それに、雪の降るやうな寒い時に東の方の天狗山からなんぞ風が吹いて来る筈がないつて。」

「さうかえ、お前がさう思ふのなら大丈夫だらうからお出で」頓吉の母は頓吉を大層頼りだと思つてゐますので、そのまゝ安心してゐましたけれども、さうは云ふものゝ、頓吉も心の中では何んとなく恐ろしいので、歸りには天狗山の方は見向きもしないで、息もつかずに家に駆け歸るのでした。

この頓吉は笛を吹くことが大層上手でした。それで、村の人は誰いふとなく「笛の頓吉」と綽名をするやうになりました

た。頓吉は暇さへあれば妹の花子を連れて裏の山へ行つては篠笛を吹いてゐます。頓吉は誰にも笛を教はらないのですが自然と上手になつたのです。そして節なども自分で自由自在に作るのです。

「兄さん、私今なんだか淋しくつてしようがないの、だからね、楽しさうな笛を吹いて下さいな」と、妹が申しますと、「よし、よし。」と云つて直ぐに吹き出します。そして思ふ通りに如何にも楽しさうな、まるで花の咲いた五月の野や空を見るやうな晴れ晴れとした節を吹くのでした。

このやうな調子で、また哀しさうな笛を吹いて下さいと云へば、如何にも悲しく、今にも涙のこぼれ落ちさうな節を吹いて聞かせるのでした。ですから、頓吉の笛を聞いて感心しないものは一人もありません。頓吉は偉い、あれは笛の天才といふものだやと村の人は皆頓吉を賞めそやしました。

二

天狗山には本當に天狗が住んでゐたのでした。その家來には風の神や、病氣の神や、意地悪神や、まだその外に種々な恐ろしい魔物がゐりました。

或日のこと、天狗はそれ等の悪神や魔物共を集めて、

「近頃はさつぱり面白いこともないが、誰か何んとか面白いことを工夫するものはないか。」と申しました。すると風の神が立つて、

「近頃聞くとところによると、麓の村には頓吉と云ふ大層笛の上手な子がいるさうです。あれを連れて来て笛を吹かせて見たらどうでせう。」と申しました。それを聞いて天狗は赤い顔の皺を動かすほど喜んで、



「それはいい、思ひつきだ。早速お前行って連れて来ないか。」
「かしこまりました。」

風の神は天狗から許しを受けたので、山からのこゝろと麓の方へ出掛けました。

この天狗山の風の神は悪い心持の凝り固つたものですからこの悪神が風を吹かすと、その風の中には種々な悪い心持が沁み込んでゐるので、一度これを吸ひ込むとどんな良い心の人間も心持ががらりと悪く變つてしまふのです。

その日は折よく雪がチラ／＼降つてゐました。風の神は小高い丘の上に立つて頓吉の来るのを待つてゐました。それは恰度頓吉がいつもお師匠さんの家から歸つて来る時分なのです。風の神は暫らく待つてゐるうちに寒さに慄へ出しました。北山の方から寒い北風が吹いて来ます。

「いくら職業だと云つてさうビユウ／＼吹かすな。温い天狗山の風の神様にとつちや、寒くて堪らないや。」

風の神はぶつ／＼と獨言を云つてゐました。そのうちに、向ふから頓吉の歩いて来るのが見えました。頓吉は今日も雪が降つてゐるので、睨眼もふらずにどん／＼歩いて来ます。

風の神は恰度いゝ處へ頓吉が来たと思ふ時分に、ウーンと下腹に力を入れますと、見る／＼お腹が大きくなりました。それを口から力を入れてプウ……と吹き出しました。

その時頓吉は一寸立止つて風の方を見ました。けれども風の神は頓吉の眼には見えよう筈はありません。頓吉はそれなりどん／＼道を急いで行つてしまひました。

「占め／＼これで俺の役目はすんだ。」
さう云つて風の神は山へ歸つて行きました。

可哀さうに、頓吉は天狗嵐を胸に吸ひ込んでしまつたので、然し、頓吉はそんなことはちつとも知りません。

今迄素直で親孝行であつた頓吉は、急に意地悪になつてしい妹をいぢめたりします。頓吉のお母さんは近頃打つて變つた頓吉の様子に大層心配しまして、これは屹度お師匠さんの所て悪い友達にかぶれたに違ひないと思ひましたので、わざ／＼お師匠さんの家へ出掛けて行つて見ましたけれど、考へてゐたやうな悪い子供も居りません。それではひよつと

すると、天狗嵐に吹かれたのかも知れないと思ひましたので、お父さんにそつとそのことを話しました。するとお父さんは「そんなことがあるものか、第一天狗嵐なんて近頃はちつとも吹かないではないか。それはきつと頓吉が積着になつたのだから、一つ凝らしめてやらう。」と云つて、頓吉を呼び出さんさん叱つた上に手をあけて打つたりしました。頓吉はさも後悔したやうに畏まつてゐましたが、決して心から後悔してゐるではありません。頓吉の心は天狗嵐に吹かれてからすつかり悪く變つてしまつたのでした。

その内に頓吉の母はどうしたものか大病になりました。けれども心の變つた頓吉は、少しも看病しようとしません。母は次第に悪くなるばかりでした。

或日のこと、頓吉は妹を連れて山へ登りました。雪が積つてゐるので登るのに大層骨が折れましたが、頓吉は厭がる妹を無理矢理に連れて或山の頂上に登りました。

「雪滑りをやつて見せようか。」
頓吉は妹に向つていひました。

「ええ、だけどどうしてするの。」

「そりア譯はないさ。」

といつて頓吉は松の枝をへし折ると、その葉の繁つてゐるところをお尻の下に敷いて、枝元の方を両手で掴みました。

「かうしてやれば隣さする間に家まで行つちまふよ。」

「さう、面白いわね。そしてわたしは歩いて歸るの？」

「決してア、お前なんかには雪滑りが出来るもんかい。」

といつて、頓吉は山の頂から雪滑りを始めようとしていました。

妹はふと気が付いて見ると、頓吉が家の方と反対の方角に降りようとしてゐるので、慌て、それを止めました。

「兄さん、違ふわよ。家はこつちへ降りなけりア駄目だわ。

そつちは天狗山の方ぢやアないの。」

「馬鹿を云へそつちが天狗山だ。お前間違つてゐるんだよ。」

「いゝえ、兄さん、そりア違ふわ。御覽なさい。私達が登つて来た足跡があるぢやアありませんか。」

「だつて登つて来た時には曲り曲つて歩いたぢやアないか。

今度は真直に降りるんだよ。」

「だつて、違ふわ、兄さん。雪滑りはお止しなさいよ、そして歩いて歸りませう。」

けて、その子供を連れて来るやうに申しました。

間もなく獸達は子供を連れて

来ました。見るとそれは天狗の

考へた通り頓吉でした。頓吉は

山の上から降り口を間違へて天

狗山の麓に降りてしまつたので

す。そして歸るにも歸られず、

寒さは烈しいし、違々氣を失つ

て倒れたのでした。

天狗は頓吉をつく／＼見て、

「うむ、却々傾口さうな顔をしてゐる。おい

兎、お前達は火を焚いてこの子を温めてや

れ。」と申しました。

兎は忽ち枯枝を集めて来て火を焚き頓吉を

温めましたので、やがて頓吉は正氣付きまし

た。そして眼をあげて見ますと、赤い恐ろし

い顔の、鼻の長い天狗を始め、恐ろしい顔付



妹は何んだか恐ろしいやゝな悲しい心持になつて、しくしく泣き出しました。

「何をめそ／＼泣いてゐるんだ。俺は先へ行くよ。」と云つて

頓吉は滑り始めました。

「あら、違々兄さんは方角を間違へちやつた。」

といつて妹は驚きながら見てゐると、頓吉の乗つた松の枝

のスキーは矢のやうに下つて行きます。そして時々雪が烟の

やうにまた浪の飛沫のやうに立ちます。見る／＼頓吉の姿は

白い朦々とした雪の烟の中に見えなくなつてしまひました。

妹は落膽して山を下りました。そして妹が家へ歸つて両親

にそのことを話した時には、父も母もどんなに驚いたこと

せう。

天狗山では風の神が頓吉に風を吹きかけてからもう来さう

なものだと、毎日のやうに頓吉の来るのを待つてゐました。

或日のこと、兎が天狗のところへ飛んで来て、麓に人間の

子供が倒れてゐることを知らせました。それは屹度頓吉

に違ひないと思つたので、天狗は早速い／＼な獸共に命令

をした者共が眼の前にあるので、思はず「キヤ
ーッ」と云つて倒れてしまひました。天狗は大
きな聲で笑つて、

「あつは、うゝ、この子は俺達の顔を見たけ

で氣絶しちやつたよ。兎、矢張お前が一番優し

さうだから介抱してやれ。」

「畏りました。」

兎はまた頓吉を介抱しましたので、頓吉も氣

が付きました。

「頓吉さん。そんなに怖がらなくともいゝので

すよ。決して誰もあなたを取つて喰はうと云ふ

ものもありません。皆んなあなたの仲よしにな

りたいのですよ。」兎は親切に申しました。頓

吉は漸く安心しましたので、恐ろしく兎に馴ね

ました。

「兎さん、此處は一體何んといふ所なんです

か。」

すると兎に更つて天狗が申しました。

「此處は天狗山と人間達が云つてゐる所だ。俺達はお前を呼び寄せたのだよ。」

頓吉はこれは飛んでもない所へ来たものだと思ひました。そして話に聞いたことは本當だったので、自分もこれらの魔物共に喰はれてしまふのかと思ふと、急に魂が抜けたやうに落膽してしまひました。

「頓吉、何もそんなに悲しうな顔をしなくともいゝよ。俺達は決してお前をひどいめに遣はせようと思つて連れて來たのぢやアないのだよ。」と天狗は柄にも似合はない優しい聲で云ひました。

「それぢア何の爲めにこんな所へ呼び寄せたのです。」頓吉は少し勇氣を出して云つて見ました。すると今度は風の神が更つて申しました。

「お前の笛が聞きたいからだよ。何しろ我々もかうして山にばかりとち籠つてゐても退屈でたまらないからな。」

すると意地悪神もその憎々しい顔にも似合はず、嬉しうさうな聲で云ひました。

よりももつと美しいものでありました。

すると天狗を始め悪神達や獸共までその笛の音にうつとりしてしまつて、中にはあまりの悲しさにほろ／＼涙を流すものもありました。頓吉が吹き終つた時、天狗は大層喜んで、

「ほんたうにお前の笛の音は不思議な程いゝ音がする。だが今のは餘り悲し過ぎた。どうか今度は一つ面白いものをやつてくれ。」

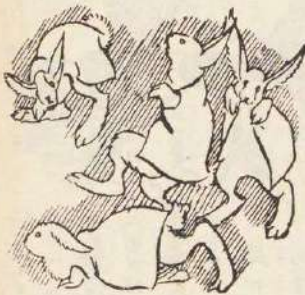
頓吉はその時ふと、よい考へが浮びました。それはうんと面白い節を吹いて、魔物達や獸共をすっかり浮かれさせ、その間に逃げて歸てやらうといふのでした。さう思つたので、頓吉は笛を取ると



「さうだ。俺達はどんなにお前を待つてゐたか知れない。何しろ毎日獸共の吠える聲や囀み合ふ聲ばかり聞いてゐるぢやアつく／＼飽きるよ。」

すると、蒼い顔の病氣の神まで合體を打ちました。「お前の見事な笛の音を聞いたら、荒くれた獸共だつて皆んなやさしい心になるかも知れないよ。」

頓吉はかうまで皆の者から云はれて、やうやく得意らしい氣持になつてきました。腰のあたりを探つて見ると、いつも離したことのない笛は矢張腰にさゝれてありました。「どうだ、早速一つやつてくれないか。」



と天狗が云ふので頓吉はもう怖いことも忘れて笛を吹き出しました。それにしても頓吉は、こんな所へ捕へられて果てはどんなことになるやうと心細く思つてゐましたので、その節は思はず、淋しく、また悲しい心を表してゐました。その音は月の光のやうによく響いて、また魔物の眼

それは／＼樂しうな、面白い節を吹き出しました。するとその調子に連れて一番始めに、兎の長い耳がピクピク動き始めました。次には狼が尻尾をふらく動かし出しました。その時、天狗はさも堪らないと云つた風で、

「こいつは愉快だ。」といひました。すると今まで我慢してゐた他の惡神達も、

「こいつは愉快だ。こいつは愉快だ。」と云ひ出しました。そして思はず一人が踊り出すと、すぐに皆んながその笛の音に合せて面白可笑しく踊り出しました。

頓吉は此處ぞとばかりに笛も裂けるばかりに吹きたてました。すると魔物や獸共はますます激しく踊り出

して、たうとう疲れ切つてへとくになりました。けれども頓吉は笛を吹くの止めませんので、天狗を始め鬼に至るまで、この上笛を吹き續けてゐられたら倒れてしまふ位になりました。

「よして呉れ、助けると思つてよして呉れ。」

天狗は遂に堪らなくなつてかう叫びました。

すると、これにつれて他の悪神共も口々に同じやうなことをいひました。頓吉は一寸笛から口を離して、

「それぢやア僕のいふことを聞くか。」と、今度は少し威張つて云ひました。

「聞くとも、聞くとも、どんなことでも聞くから、笛を止めて呉れ。」と天狗は云ひました。

「よし。」と云つて頓吉は今度は本當に笛を吹くの止めました。魔物達や獸共はもう疲れ切つて立つことも出来なくなつてゐました。

「それではもう人間に害をすることは今日限り止める。」

頓吉がさう云ふと、天狗は恐れ入つて、

「へえ……」と頭を下げました。

したけれど、今あなたの悲しい笛や嬉しい笛の音を聞いて、心から優しい氣持になりました。もうすっかり後悔しましたから、今までのことは勘辨して下さい。」と、赤い長い鼻を地にこすりつけて云ひました。すると外の魔物共や獸共まで頓吉の前にひれ伏しました。

その時病氣の神はひよつくり歸つて來まして、

「頓吉さん、あなたのお母さんはすつかり丈夫になりました。」と云ひました。

それを聞いて頓吉はどんなに喜んでか知れませんが、そして今度は魔物共を縛り上げてひどい目に遭せてやらうと思ひました。頓吉は鬼に命令けて藤曼を澤山持つて來させました。それを見た病氣の神はふと氣が付いたやうに、

「頓吉さん、お願ひですからあなたの體に一寸觸らして下さい。」と云ひました。

「何をするのだ。」と頓吉は怒つて云ひました。

「あなたの病氣を治して上げたのです。」

「何？ 俺に病氣なんかあるものか。」

「いや大あります。あなたの氣が付かない悪い病氣がありま

今度は風の神に向つて、

「お前は今日限り一步もこの山から出てはならぬ。」と申付けました。また病氣の神に向つて、

「お前は一番悪い奴だ。去年風邪をあんなに流行らしたのもお前だらう。」

「ええ、さうです。」と風の神は面目なげに云ひました。頓吉は更に、

「お前は病氣を流行らすことが出来るなら、また病氣を治すことも出来るだらう。」

すると病氣の神は得意になつて、

「出來ますとも。」と答へました。

「それではお前はこれからすぐに行つて僕のお母さんの病氣を治して呉れ。」

「はい、畏りました。」

病氣の神はさう云つたかと思ふと、もう影が見えませんでした。その時天狗はしみじみとした聲で、

「ほんたうに私達は生れてから今まで恐ろしい叫び聲や悪いことより外聞いたことがないので、少しも氣が付きませんで

す。それを治さないと私達まで困ります。」

かう云はれて頓吉は不思議に思ひながら、病氣の神に體を觸らせることにしました。病氣の神はいきなり頓吉の胸をほとんど叩きました。すると頓吉は何んとなく胸が軽くなつたやうな氣がしました。そしていざ藤曼で魔物共を縛らうとした時に、ふと元のよい美しい心が燃え出して來ました。

「あゝ悪かつた。お前達を縛らうなんて私は悪い考へを起した。」と氣が付きましたので、そのまゝ藤曼を放り出してすたすた歩き出しました。魔物共は大層喜んで頓吉に幾度もお禮を云つたりお詫びをしたりしました。

やがて頓吉は獸共を送られて山を出しました。其處にはもう丈夫になつたお母さんやお父さんを始め村の人々が心配して頓吉を探しに來てゐました。頓吉は山のことを残らず話しましたので、村の人不思議な笛の力に感心しました。

そして、これ程笛が上手なら都へ行つて一層修行したら、もつと偉いものになるだらうといふので、頓吉は父母に許されて都へ出ました。そしていゝ先生に就いて一生懸命に勉強し、遂に日本一の笛の名人となりました。(なほり)



鈴蘭の花

(推 薦)

二瓶けい子

鈴蘭の花の
鈴はなんと鳴るの

ママさんに逢はれず

さびしくて鳴るのよ

パパさんに逢はれず

戀しくて鳴るのよ

可哀想な花だわ

可哀想な鈴だわ

鶏頭の芽

(推 薦)

橋本静雨

鶏頭の花は
鶏の鶏冠

はこべの中に

まじつて萌えた

鶏頭の花は

いつ咲くだらう

出た芽を 鶏が

つんで食べた





林檎ひとつ

奥山晃一

温い春の日のことでありました。道介さんはこんな温い日にこそ、摘み草に行きたいなあと、思ひながら、大好きのジョンをつれて散歩に出かけました。ジョンはまだ子犬でしたから、道を歩いてゐる時だつてもう始終道介さんにじやれかゝつたりふざけたりしました。

遠いので、まだ道の半分位しかきてりませんでしたが、ですから道介さんも、雲吉さんもすつかりお腹がすいて仕方ありません。

「ねえ道ちゃん、お家にゐればもうお晝のおやつが貰へるのにねえ。」と雲吉さんが云へば、

「あゝ今日はおやつはもうどうでもいいがお晝ご飯だけでも食べたいね。」と道介さんはひもじさうに答へました。けれども、太鼓山はもう直ぐ眼の前に見えてゐましたから、このまゝ後へ引かへすのは、どうしても残念なやうな気がして、そんなに云ひながらもお山の方へ歩いて行きました。

二人の後からは、ジョンとボスがこれもお腹をすかして、くんくん鳴いたり、道傍に何か落ちてゐないかと、きよろくしながらついて歩きました。道介さんも雲吉さんも、この犬達と同じやうに、何處かに食べられるやうな

道介さん達の住んでゐるところは、恰度東京の郊外の、玉川のやうな田舎でしたから、道介さんはいつもお友達と遊ぶ、小川の邊までやつて参りました。するとその小川の邊には、お友達の雲吉さんが、何か繪本を読みながら、氣持で若草の上へ寝轉んでゐました。その傍には矢張りボスと云ふ茶色の犬が、頻りと花から花へ飛び廻つてゐる蝶々を追かけ廻してゐるのでした。道介さんは雲吉さんを見かけると、

「雲ちゃん！ その本何に？」と訊きました。

「あゝこれかい。これは昨日お父さんが街から買つて来てくれたの。面白い話がどつさり書いてあるんだよ。」

雲吉さんはさもく嬉しさに、そう答へるのでありました。

「さうかい、どれ僕にもお見せ。」道介さんは雲吉さんの傍へよつて行くこと、

果物でもなつてゐないかなと、思ひながら歩いてゐるのでありました。もう犬も人間も「何か食べたいな」と云ふことだけ考へてゐました。

その時でした。道介さんが源兵衛畑のところまで来ると、向ふの方の畑の隅に、林檎のよく熟したのが、たつた一つなつてゐるのを見つけました。そこは昔源兵衛といふ人がこしらへた畑だつたものですから、もうすつと前から、みんなの人が源兵衛畑と呼んでゐるところなのでした。

「おや、あそこに林檎があるぜ。」

道介さんは喜びのあまり、大きな聲でかう叫びました。

「さうだよ。僕もそれをいま見つけたんだ。」

雲吉さんもさういひました。

「いやだよ。あれは僕がみつけたんだよ。」

「何いつてるの僕もみつけたんだよ。」

六〇
「繪本はまだこんどにして、今日は太鼓山へ蕨を取りに行かうぢやないか。」雲吉さんはさう云つて、道介さんを誘ひました。道介さんも摘み草が何かして遊びたかつたところでしたから、早速繪本のことなんか忘れて了つて、

「うんそれがいいよ。ちや犬もつれて行かうねえ。」と云ひました。

「それがいゝとも。」

で二人はすみれやたんぽぽや、または櫻草やきんぽうけやなつなやれんげ草が一ぱい咲いてゐる美しい野原の路を太鼓山の方へ歩いて行きました。ジョンとボスと二匹の犬も嬉しさに追つかけてをしたり、小川をじやぶくじやぶつたりして行きました。

二人は麥笛を奏へたり、摘み草をしたりして、ほんたうにほんたうに楽しく遊びながら歩きつゝけました。

その中いつかもうお晝になつて了ひました。けれども太鼓山までは離れ

「僕の方が先だよ。」

「いやそれは違ふよ。」

二人はもうお腹が空いて堪らない時でしたから、さう云つて争ひながら、一生懸命で畑の方へかけ出しました。道介さん達がそんなにかけ出したものですから、二匹の犬も空腹でいやではあつたが、仕方なしに二人の後からかけ出して行きました。

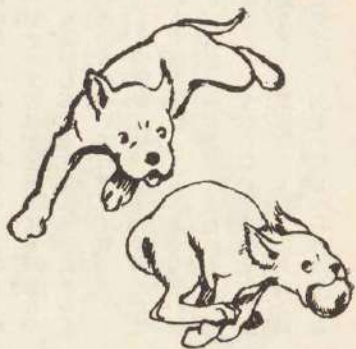
やがて二人は畑の隅まで来て、道介さんの方が先に、その林檎をもぎ取りました。

「いやだよ。僕にも半分おくれよう。」

雲吉さんは、もう泣き出さない許りにさう云つて道介さんに頼みました。

けれども道介さんはそれを聞き入れませんでした。

そこでたうとう二人はそのばで組み打ちを始めて了ひました。林檎は畑の中へ投げ出したまゝ、二人は一生懸命でどたばたと、上になつたり、下にな



つたり争つてゐました。それでも始めの中は、二人共林檎のことが気がかりで仕方ありませんでしたが、いつか道介さんの足が、雲吉さんの鼻を蹴りつけたので、雲吉さんはかつとなつて道介さんの耳を千切れる程にひつぱりました。でも二人は夢中になつて、争ひの方に許り氣を取られるやうになりました。「うん！ うん！」「やつとこ！ やつとこ！」二人は知らず識らずそんなことを呼び合ひながら、四本

の足を空に向けて、ばた／＼やつてゐるのでありました。

そのすきをねらつて、ボスは素早く畑の中へ落ちてゐた林檎を、ひよいと銜えて一散にそのばから逃げ出しました。これを見たジョンは、うつかりしちやゐられないといふ風に、ボスの後を追つかけて行きました。道介さんと雲吉さんは、そんなこと、は少しも知らず、まだ畑の隅で「うん！ うん！」「やつこら！ やつこら！」とばたばたやつてゐました。

やがてジョンは太鼓山の麓で、ボスに追つ着きました。さうしていきなり「うをう！ うをん！ うをん！」とボスに喰つてかゝりました。こゝでまた林檎を投げ出したまゝ、ジョンとボスが争ひを始めました。ところがボスはジョンにうんと噛みつかれたので、悲鳴をあして逃げ出しました。ジョンは後から一散に追つかけて行きました

六二
こんなことでお腹の空いた道介さん達や、犬達は肝腎な林檎のことをそつちのけにして、争ひに氣を奪られて了ひました。

そこへ一群の鳥が「かあ！ かあ！」と鳴きながら飛んで参りましたが、ふと太鼓山の麓によく熟してゐる林檎が落ちてゐるのをみつけました。一羽の鳥は「おやい、ものがあぞ！」と思ひながら、そのばへ降りて来ました。さうして「林檎かこいつは有難い。」といつた風に、そろ／＼喰べにかゝりました。

この鳥といふ鳥は、大變ないやしん坊のより群りでしたから、一羽が食べものをみつけると、よつてたかつてそれを取り合ふのが癖でした。恰度この時も、大勢の鳥は同時に林檎のところまでやつて来て、また鳥の群で一騒動起つて了ひました。

そこへ一羽の鳥が「びーろ……」と驚によく吠た聲が、それを凄く眼をして飛んで来ました。鷹は怒／＼と下の騒動を見下しながら、空中に輪を描いてゐましたが、鳥の群が夢中になつて「があ、があ」騒いでゐる隙を狙つて、さあツ！ と飛び降りて来ました。さうしてあツ！と思ふ間にその中の一羽の鳥ははつたりその場で殺されて了ひました。鷹は小魚ならば大好物ですけれど、林檎なんか好きではなかつたのです。しかし、鳥の肉は喰べてもお甘しくないし、林檎は一寸綺麗でしたから、まあ林檎でも獲物の代りに持つて行つてやれと思つて、それをつかんで、街の空の方へと飛んで行きました。

鷹の住んでゐる森は、街を越えてまだ向ふの方でありました。ところが途中からその林檎が重くなつてやり切れなくなりました。餘りお甘いものではないし重いの馬鹿らしいと思

つたものか、たうとう鷹は街の空を飛んでゐる時その林檎を離してしまひました。

すると林檎はその街のある公園の中へ落ちて、五つ六つの片けらに砕けて了ひました。

そこへ通りかゝつた一群の蟻でありました。その中の四五匹の蟻が、一寸頭をつき合せて、何か相談でもするやうに、ごた／＼してゐましたが「い、香かするからきつと甘いよ。さあみんなで穴の中へ運び込まふぢやないか。」とでも云つたと見えて、繩になつてぞろぞろ這つてゐた蟻は、その林檎の小さい片けらはうんやらせ、うんやらせとそのまま、穴の中へ運ぶし、大きい魂はその場で少しづつ喰べてはその蜜を穴の中へ持つて行きました。

源兵衛畑の中で、どたばたやつてゐた道介さん達は、いつか畑の崖のそこ

ろから蟻が落ちて、お尻を打つたのでやつと氣がついて、

「あーつまんない。つまんない。」

「もう喧嘩はよさう。すつかりお腹がへと／＼になつてしまつたから、もうお家へ歸らうよ。」

さう云ひながら源兵衛畑へ上つて来ました。そこには林檎もなんにもないので、二人はほんやりしてしまひました。ところへ二匹の犬もさん／＼追つかけて来て、へと／＼に疲れて歸つて来ました。でまたみんなす／＼とお家の方へ歸つて行きましたが、街の公園へ運ばれて行つて、蟻の御馳走になつた林檎のことを、みんなして「林檎はどうなつたんだらう」と考へてゐました。

林檎は、たうとう食べたい食べたいと思ふ者の口へは入らないで、思ひがけない蟻の口へ入つてしまひました。



お話賣り

志村 照子

或る田舎に五助といふ若者がありました。大そう親孝行な男でしたが、家が貧しくて、たつた一人のお母さんに樂をさせてあげることが出来ませんでした。町に奉公に出て、お金をためて来ようと思ひ立ちました。そこでお母さんに、「お母さん私を町へ奉公にやつて下さい。一生懸命に働いて、

きつとお金をためてきます。」とお願ひしました。お母さんは喜んで町に行くことをゆるしましたので、五助は、
「それではどうか淋しくても待つてゐて下さい。五年たてばきつと歸つて参ります。」とお母さんをお家に残して町に参りました。

町に出た五助は、町の大きな豆腐やに奉公して、五年の間一生懸命骨身を惜しみますましたので、主人も大變感心

して、五助々と可愛がつてくれました。

さていよいよお家に歸る日になりました。そこで何かお母さんによいお土産を買つて行き度と思ひまして、町を歩いて参りますと、ふと「お話を賣ります。」と云ふ看板が目にとまりました。五助は、

「さうだ、お母さんは大變お話がお好きだつたから、何か面白いお話を買つて行つて上げていたら、どんなにお喜びになるだらう。」と思つたものですから、そのまゝ、そのお家に入りました。そこには白いひげの生えたお爺さんが、一人机にむかつて何やら本を讀んでました。

「今日は、私はお話を賣つて頂きたいのですが……。」と五助が申しますと、お爺さんは本を讀むのをやめて、

「あ、よろしい。だが私の話は少し高いよ。」と申しました。

「それでは一番安いのお願ひします。」

お爺さんは暫く黙つて居りましたが、やがて

「大木のもとに立ち寄るな。」とたつた一言いひました。五助は驚いて、

「そんな短かい話ではとて、お母さんを喜ばせる。とんなんか



出来ません。もう少し高いのをし
て下さい。と頼みました。

すると、お爺さんは今度は、
「知らぬ人に物借るな貸すな。」

と、これだけいひました。そこ
で、五助は三度目に思ひきつて、
「一番高いのをして下さい。」と
申しました。

すると、おぢいさんは、また、
暫く考へてのりましたが、

「短氣は損氣。」と一言いつてす
ましてゐます。五助はもうがっ
かりして、しかたなしにお金を
拂つてそこを出ました。

五助が廣い野原にさしかかつ
た頃から、何だかお天気があや
しくなつて来て、やがて雨が降

権に、何んともいへない大きな音がして、五助は氣をうしな
つてしまひました。

暫くして氣のついた時はもう雨はやんで、あたりは薄暗く
なつてゐました。氣がついて見ると、さつき五助が雨やどり
してゐた木に、雷が落ちて、太い幹がまつ二つに裂けてくろ
こけになつてゐるではあるませんか。

「あゝなんといふあふないところだつたらう。もう少しで大
事な命をなくすところだつた。」と五助は大そう喜んで道を急ぎ
ましたが、そのうちに、夜になつてしまひました。提灯の用
意はなし、闇夜に田舎道はなかく、困難なので、五助が困つ
てゐますと、向ふから來かゝつた一人の男が、

「もしもし！ この闇夜に灯がなくてはさぞお困りでせう？
私はもう家がぢきそこですから、この提灯を貸して上げませ
う。」と親切に自分の提灯を貸してくれました。

五助は厚くお禮をいつてその提灯を借りて歩き出しました
が、またふとお爺さんのいつたお話が頭に浮びました。

「知らぬ人に物借るな、貸すな！」さうだこれはいけない。」と
思つて、その提灯を道ばたの木にかけました。そして、その



り出しましたが、何しろ野原の
ことですから雨やどりをする家
はないし、五助は途方にくれて
しまひました。そのうちに雨は
ます／＼はけしくなつて来て、
雷さへ鳴りはじめましたの
で、五助はしかたなしに、そこ
に立つてゐた一本の大木の下に
駆けこんで、雨の小降りになる
のを待たうと思ひました。その
時、五助はふとさつきのおぢい
さんの話を思ひ出しました。

「大木のもとに立寄るな！」さう
さうあのお爺さんが云つたつ
け。」

五助はあわて、木の下を出
て、雨の中を駆け出しました。
と目もくらむやうな稲妻と一

まゝスタノと道をたどつて來ますと、やがて後の方でズド
ン！ と鐵砲の音が聞こえました。

五助が驚いて振りかへつて見ると、鐵砲は五助がさつき提
灯をひつかけて來た木にあたつてゐました。これは提灯を貸
した男が泥棒で、灯を目あてに鐵砲をうつつてお金をとらうと
したのです。

五助はお爺さんのお話のために、二度まで命を助かつて、
大喜びでなつかしい我家に歸りました。ところがどうでせ
う。お家の障子には大きな坊主の影がうつつてゐるのです。

「これはきつと泥棒に違ひない。村の人々をそつとよんで來
て、ひどい目に逢はせてやらうかしら。」と思ひましたが、

「さうだ、短氣は損氣とあのお爺さんが云つた。兎に角入つ
て様子を見よう。」と思ひなほして、お家に入りました。とこ
ろが五助が泥棒と思つたのは、お母さんが頭をそつて尼さん
になつてゐたのでした。

五助はそれから後、お母さんと二人で幸福に暮したといふ
ことです。(なほり)



世界名作童話物語

家なき子 (つなき)

三宅房子

さまよひの旅

私はお爺さんと裁判所で別れて、涙をふきふき宿屋へ歸つて来ました。すると、丁度宿屋の御亭主が庭にゐて、

「二箇月の悪役です。」といつたゞけで私はすん／＼、向方の部屋の方へ行かうとしました。私にはそれ以上いふ元氣がなかつたのです。「おい／＼お前は其間の二月をどうする積りだね。お前は自分をばいめ犬や猿に食物を買ふだけのお金がなければ暮せないだらうが。」

私は大急ぎで町を出ました。なぜかといふと、犬に口輪をはめてありませんから調査に目をつけるが大變だと思つたからです。私はその時かくしに十一錢しか持つてゐませんでしたが、それだけで口輪を買ふにも足りないのです。

したがって私の馬車をとび越しました。袋に私は私の袋の毛を引つづけて、くつくと嬉しそうに笑ひました。少し歩いて行くと、路傍に一本の大きな樹がありましたが、私達は木の下の草の上に坐りました。其處で私はパンを五つに切りました。そして、それを各々に分けてやりました。皆なほが／＼と食べましたが、それだけではとても足りないで、まだ皆なお腹のすいた顔をしてゐました。

「そんな事は私の知つたことぢやない、さアすぐに出て行つてくれ。しかし、五分間の猶豫だけはしてやる。五分間たつて私がこゝへ來てもまだあたら承知しないぞ。」御亭主はどなり乍ら家へ入つて行きました。私は御亭主といひ合ふのは無厭な事を知りました。私はどうしたつて此處を出て行かなければ駄目なのです。私は犬と猿をつれて、既の方へ行きました。それから数歩を前にしよう

子供をおびえさせてはいけないと思つて、私は前より少し聲かに弾きました。子供は両手を伸して、よろ／＼歩いて來ます。丁度二歩で直き私達のあるところへ來ようとした時、子供のお母さんが氣づいたので、きつと、あわて、後から駈出して來るだらうと思つてゐたのに、そんな事はしないで、子供の名を呼んでゐます。子供はおとなしく返つてお母さんの方を見ました。そして、音楽も踊りも好きぢやないのだ。きつとそれに違ひないと私は思ひました。

私はびつくりして歌をやめました。私はほん
かんとしてその人の顔を見つめました。

「何をしてあるんだ。」

「ハイ、唄をうたつてなりました。」

「お前は此處で唄をうたふ許可を得たのか。」

「いえ。」

「それではあつちへ行け。行かないと拘引す
るぞー。乞食小僧めー」

この人は村の役人であつたのです。私はお
爺さんのやうな目にあつては大變だと思つて

急いで支度をして逃しました。犬達も頭を
たれて、すこゝ後からついて来ました。

私は白い道の上を真直に進んで行きました
何處かで今夜の寝る場所をさがなければなら
ないと思つてあるうちにだん／＼日が暮れ

て来ました。夕日は山に隠れてしまひました
が、まだいゝ場所が見つかりませんでした。

もうどうしても何處かに寝る場所を見つけな
ければならないのです。そのうちに漸く林の
間へ出ました。

林の中には大きな花崗石がころがらつてゐて
石と／＼の間には洞穴のやうなところがありま
した。そして、その中には私の足跡が一つは

て、みんなと別けて食べました。

私は今日こそお金を儲けなければならぬ
と思ひました。私はどこか芝居をするのに都
合のいゝ場所を探さうと思つて、切りに見て

歩きました。その時、ふいに後の方で、
「泥棒々々」と頓狂な聲で叫ぶのが聞えまし
た。何かと思つて振り返ると、セルピノ
が口に大きな肉をくはへて私の方へ向つて驅
けてくるではありませんか。そして、その後

をお婆さんが追ひかけて来たのです。さう大
變なことになつたと思ひました。肉の値段を
返せといはれても、私には一文もお金があり
ませんから、捉れば牢屋へ入れられるのだと
思ひました。私は夢中で逃げ出しました。F
ルスもカビも、私と同じに駆け出しました。

私は私の肩に攀つてあましたが、落ちたら大
變と思つて、私の首にしがみついてあります。
「待てッー。泥棒！」と、外の人達までが嘸
嘸つて一しよになつて追ひかけて来ました。

私達ほとんど逃げました。きつと一里以上
も逃げたに違ひありません。振返つて見ると
もう誰も来なかつたので私はホッと息をつき
ました。しかし、その時には泥棒をした本人

たまつてあります。寝る場所には丁度よい處で
すから、私達はその中へもぐり込みました。
上には風を防いでくれる家根があるし、下には
敷いて寝る布團が出来た譯です。

三匹の犬は私のまはりに輪のやうに坐りま
した。そして、お腹がすいてゐる事を訴へる
やうな目をして私を見てあります。私はかくし
から三銭のお金を出しました。

「私達は今夜はこゝで寝るのだよ。お前達も
知つてる通り私の持つてあるお金はこれだけ
なんだよ。今夜この三銭を使つてしまふと、
明日は朝飯に何にも食べられなくなる。今日
は少しでも食べたのだから、これは明日まで
とつて置く事にしようれ。」

私は犬達に向つていひました。そして、三
銭をまたかくしへしまひました。

その時、カビとドルスは諦めたやうに黙つ
て首を下げましたが、セルピノだけは諦めら
れないと見えて、いつまでもぼう／＼唸つて
ゐました。

その晩、私は眠ることが出来ませんでした。
明日のことを考へると、心で／＼／＼と目
れないのでした。私は寒い夜にお腹が痛つ

セルピノだけは何處へ行つてしまつたか
を見せませんでした。

私は心配しました。このまゝ行つてしまつ
たら、セルピノは迷子になつてしまふでせう。
泥棒をした悪い奴ですから罰してやらなければ
なりませんが、一匹でもあなくしたら親方
に對して私の申譯がありません。そこで私は
樹の下に隠んでゐて、セルピノの歸つて来る
のを待つことにしました。二時間も三時間も
そうしてゐました。けれども、たうとうセル
ピノは歸つて来ませんでした。

私はセルピノの名を呼んで見たり、口笛を
吹いて見たりしましたが無駄でした。多分う
まい御馳走を手に入れたので、どこかの藪か
げに寝こんでゐるのでせう。

その間に私達のお腹は益々すいて来て堪へ
られなくなつて来ました。犬達は頼むやうな
目つきをして私を見てあります。私はお腹をさ
すつては怒つて、きやつきやと叫んであります。

私は晩方になつても止むを得ないから、セ
ルピノの歸りを待たうと決心しました。しか
し、何もしないでゐてはますますお腹のすい
てゐる事を感じるばかりですから、何かしな

てゐるのを見ました。どこも、かしこもしん
としてゐて風一つありません。木の葉のそよ
／＼音も、鳥のなく聲もしませんでした。見渡
すかぎり青白い空がひろがつてあります。

セルピノが、

私は自分が一人ぼつちなことをつく／＼と
感じました。世の中から捨られてゐる事をつ
く／＼感じました。私を可愛がつて育ててく
れた母さんの事や、牢に入れられてゐる親方
のことが思出されて来ました。私の目は涙で
一ぱいでした。さうしてあるうちに、私はう
とうと眠つてしまひました。

目が覺めて見ると、もうすつかり明くなつ
てゐました。小鳥が林の中で歌をうたつてあ
ります。遠方のお寺では朝のお祈りの鐘がなつ
てゐます。お日様はもう空高く昇つて、私の
勞れた心と身體を慰めて下さるやうに照つて
あります。

私達は鐘の音を自みてに歩き出しました。
そこにはきつと村があつて、パン屋もあるに
違ひないと思つたからです。

果して村がありました。私はすぐにパン屋
へ飛込んで行つて、一斤五錢するパンを三錢
だけ買ひました。そして、それをかき／＼

食べました。その時、ふと
思出したのは、親方がいつか話してくれた事
に軍隊が長い行軍をして疲れ切つた時には、
軍隊が愉快な曲をやつて、兵隊の疲れを忘れ
させるといふことでした。さうだ、私も愉快
な曲を琴で弾いてやらう。さうしたら、き
つとお腹のすいた事も何も忘れられるだらう
可哀さうな二匹の犬も氣が浮々して、面
白、をかしく時間がたつたらう。——さう私
は思ひました。そこで、私は犬と狼を一行に

たまつてあります。寝る場所には丁度よい處で
すから、私達はその中へもぐり込みました。
上には風を防いでくれる家根があるし、下には
敷いて寝る布團が出来た譯です。

三匹の犬は私のまはりに輪のやうに坐りま
した。そして、お腹がすいてゐる事を訴へる
やうな目をして私を見てあります。私はかくし
から三銭のお金を出しました。

「私達は今夜はこゝで寝るのだよ。お前達も
知つてる通り私の持つてあるお金はこれだけ
なんだよ。今夜この三銭を使つてしまふと、
明日は朝飯に何にも食べられなくなる。今日
は少しでも食べたのだから、これは明日まで
とつて置く事にしようれ。」

私は犬達に向つていひました。そして、三
銭をまたかくしへしまひました。

その時、カビとドルスは諦めたやうに黙つ
て首を下げましたが、セルピノだけは諦めら
れないと見えて、いつまでもぼう／＼唸つて
ゐました。

その晩、私は眠ることが出来ませんでした。
明日のことを考へると、心で／＼／＼と目
れないのでした。私は寒い夜にお腹が痛つ



並べて置いて琴を弾きはじめました。

犬や猿は、はじめは踊る気もなかったやうでした。たゞ何か食べたい／＼とばかり思つてゐるのでせう。そのいちらしい様子を見てはたまらなくなつて、私はよく調子を高くして弾きました。すると、だん／＼に音楽の方が現れて来て、たうとう犬も猿も踊り出しました。私は一生けんめい弾きました。

「うまいなア——」

ふいに、その時、子供の聲でかう叫んだのを聞きました。私がびっくりして振り返つて見ると、ちき飾の桐箱にきれいな一般の舟が浮んでゐて、美しい貴婦人と男の子が乗つてゐました。「うまいなア」と聲をかけたのは此の男の子だらうと思ひましたが、その子は私位の年頃ですが甲板に仰向けになつて寝てゐるのです。

「あなたはお楽しみにやつてゐるのですか。」

さういつたのは貴婦人でした。

「いえ、犬をよこんでゐるのです。それから自分の氣晴しに……」私は本當の事がいへないで、つかう云つてしまひました。すると、男の子は貴婦人に何かお話をして

あるやうでしたが、

「あなた、もつと、やつて貰へますか。」と、貴婦人がまたいひました。

「やりますとも、舞踏にしませうか。それとも喜劇にしませうか。」

「ああ、喜劇だ、喜劇だ。」と、男の子が頓狂な聲を出していひましたが、貴婦人が、

「まあ、先きに舞踏の方を……」といつたので、私は悪琴をとつて、先きに踊りの曲を弾きはじめました。すると、カヒは前足でドル

スの顔を抱いて上手に拍子をとりながら踊りはじめました。それが終ると、今度は猿のシ

ヨリヨリが踊りました。私は夢中で琴を弾きました。でも、ちつとも疲れたとは思ひ

ませんでした。犬も猿も、やがてお禮にはお晝飯が出るに違ひないと思つて一生けんめいにやつてゐます。

その時、ふいに、見えなくなつてゐたセル

ピノが藪の蔭からひよっこり出て来て踊つてゐる仲間の中へ圓々しく割込んで、自分も一

しよに踊り出しました。私は黙つて見てゐました。男の子は大變に面白く思つたと見えて、兩

た。犬は私のまはりには列をたつて重ひました。猿は私の膝の上で踊りました。みんな夢中で食べました。



「君は、饑と一しよにこゝで暮すのはいやですか。食事が終わつた時、男の子が私の方を見ていひました。私はこの不意の質問に面喰ひ

手を動かして拍手喝采をします。ですが寝臺の上に仰向いたまゝで身體は少しも動かないのでせう。

「半身不遂なのかしら。」さう思つて私が見てゐるうちに、風の具合で船がすぐ岸のところまで吹きつけられて来たので、男の子をよく見ることが出来ました。病人だと見えて、顔が蒼くつて、額には青筋が出てゐました。

をどりが終つた時、貴婦人がいひました。「あなたの方のお芝居の見物代はいかほどですか。」

「いくらでも結構なんです。私が答へると、

「ちやア、母様、たんとおやりなさいよ。」と、男の子がいひました。この二人は母子であることがわかりました。

男の子はそれからまた何か母親に向つて頼んでゐるやうでしたが、しばらくすると貴婦人が、

「この子が皆さんに傍に来て貰ひたいといつてゐるのですよ。」と、いひました。

私達は大喜びで、すぐ船の中へ入つて行きました。傍へ行つて見ると、男の子は實際に一枚の板へ膝で腰を結びつけられてゐるので

ました。すぐには返事が出来ませんから、男の子の顔をのぞいて見ました。貴婦人も傍から、

「この子は病氣でこの板に身體を結びつけてゐなければならぬのです。それがために晝間の中少しでも面白く暮せるやうに思つてかうして船に乗せて外へ出るのです。ですから、あなたの親方が平處へ行つてゐる間だけ、私達と一緒にゐて下さいませんか。あなた

の犬とお猿が毎日藝をしてくれたら、この子はどんなに喜ぶでせう。」とさういひました。

私はこれまで船の上で暮したいと陶分思つてゐたのです。それが、今、本當に暮せることになつたのです。何といふ嬉しいことでは

う。私はあんまり嬉しくつて目がくらむやうな氣がしました。私はすぐ承知をしました。二人に向つて幾度もお禮をいひました。男の子も大變に喜んでくれて、「何か彈いてくれ給へ。」といひました。私はすぐに悪琴をとりあげてしつかりと弾りました。そして、親方が

歌へてくれたありつたけの曲を弾きました。

一體、この貴婦人と男の子はどういふ身分の人達なのでせうか。(ついでく)

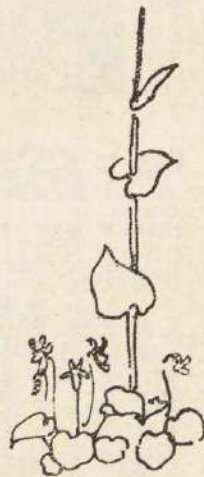
「君は、饑と一しよにこゝで暮すのはいやですか。食事が終わつた時、男の子が私の方を見ていひました。私はこの不意の質問に面喰ひ



赤いべに 貫ほ
あの花
おしやれ

おしやれ椿
野口雨情
藪の 中に
咲いてる
藪 椿
赤いべに さした
あの花
おしやれ

うしろ向いて
咲いてる
藪 椿



東京府東中 長尾アキ子
野一六七五

ウシガクルマヲ
ヒイテキタ
ウシノセナカガ
デコボコダ

(評、イ、ナア。ホントニイ、ナア。(牧水))

インキびん

福岡市荒戸三 森原英彦
番町一三五

にんげんの
かたちをした
インキびん
なぜにんげんの
形をしたか

(評、それは無理だ。にんげんがこんなにし
たのです。(牧水))

兄さん

和歌山縣海草 高橋静代
郡本木校尋五

兵隊さんが来た
兄さんもある
許、いしなア、ホントにいゝ歌だ。(牧水)

ヨツバラヒ

東京府第一 前田孝四郎
小學校尋四

僕ノキラヒナヨツバラヒ
ウチノ隣へヤツテ来タ

タぐれ

滋賀縣蒲生郡 谷次
市邊校尋四

西はまつかだ 東は白い
北の方に 馬の雲が出て
お月さんめがけて
走り出した

つらい

茨城縣眞壁郡 栗野シツ
若柳校尋六

よその高等さ行つて
しらない生徒といつしよになつて
しらない先生に
をさるのは
どれほどかなしい
ことせう

へいたいさん

大阪府泉南郡 中道光二郎
谷川校尋二



(賞) り下峠阪吉

福岡縣井高 西本義春
郡飯高 二

茨城縣若 吉田みき
柳校尋三

十五日の日は、かまやのたてまひです。
私らが學校をしまつて来ると、もう半ぶ
んころまで出来てゐました。私がきよら
やんに、いつて見てかと言つたれば、き
よらやんが「おちやのんでんだもの」と

言ひました。

それから家へいつて、私はにもつを机
の下へおいて、みんなして、たてまひの
そばへ行つて見ました。

さうしてみんなしてきわいであるうち
に、もう日ぐれ方になつてきたので、大
工さんがやめました。

さうしておのにはいつたりござんをた
べたりして、へいそくを持つてきました、
さうしてよし江ちゃんうち、父ちゃん
が、おそなへもみたいたいなもちをおせん
にのせて持つてきました。さうすると大
工さんがほうらへと言ひながらそのも
ちをまきました。

正直はごく

東京府徒橋第 北小路資俊
二小學校尋六

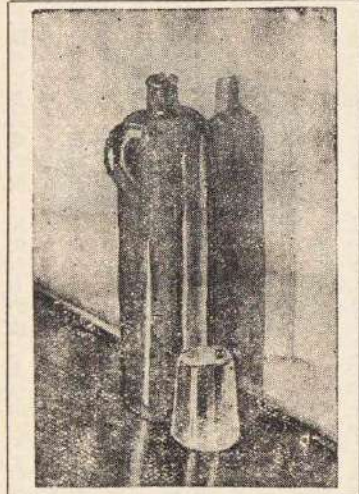
僕は正直はとくだと思ふ。僕は、正直
でない人が一番きらひである。僕ばかり
でない、誰でもきつと同じであらう。僕
のうちへ洋服屋が三人来る。其の中でや
くそくを守らない人が二人その一人の方
は一度でたのまないことにした。もう一
人は幾日待つても来ないでやうやく三日

目に来た、そしてする分あやまつてゐた、
その時お母様がその洋服屋に「やくそく
を守つて正直にしなければならぬよ。」
とおつしやつた。さうすると其洋服屋は
「もう決してそんな事はしませんから、
どうぞ又たくさんつくらせていたゞきま
す。」といつた。お母様は「それでは十一
日の五時までに来るやうに。」とおつしや
つたら、五時に来ないでもつとおそく来
た。さうしてまたカラーも出来なかつた。
お母様はもうあの洋服屋にはたのまない
とおつしやつた。もう一人の洋服屋はそ
れはくゝい人で

小犬

東京府赤坂青 服部四郎
南小學校尋六

今年の一月二十日の夜だつた。遊谷の



(賞) ブッコと瓶の一ツラユキ
町番六十八町敷屋新市本藤
男三田林

ほんかいに
まちをとると
へいたいは
かたなをさけて
マスクをかけて
ながい通りを
あるいてた

雪

山梨縣秋田
小學校尋四 仲田さちゑ
あれあれ雪が
學校の屋根の上に
あその山に
あの木の上に
小さな松の木が 雪だらけになつてゐる

熊 嵐

新潟縣中頸城郡名
香山村妙香校尋五 増村正義
こないだどつかの村で 熊とれた
その次の日から 七日七晩
大あらしで 汽車も動かなくなつた
電氣もきえた 道もなくなつた
郵便も来ない 早く電祭
しやんせい

妹

福井縣大飯郡
高濱校高二 松本せい
妹が鏡の前に坐つて

むさくれた髪をといてゐる
時々いたさうに顔をしかめもつて
それでも一心に

こまがすきだ

山梨縣北巨摩
郡多麻校尋四 清水勝重
いつでもく
かばんにはいつてゐる
がつかうの
にはでまわすのだ

時 計

京都市錦林
小學校尋三 神戸正二
かつちんかつちん
一時二時
三時になつた
おやつです
四時と五時も
通り越し
六時はごはん
八時には
ねるおしたくて
半にねる

一 日
東京府女子師範 齋藤 絢子
附屬小學校高一
私が朝起きてお早うをする時

伯母さんの家へいつた歸りに長谷寺の前
まで来ると、右の方の道から年をとつた
おばあさんが寺の前まで来ると、石段の
側へ丸い小さな白い物を捨てた。白い物
はむく／＼と動き出した。轉がる様にお
ばあさんの後をついて行く。白い物は
悲しさにクン／＼なく。それは小犬
だつた。おばあさんは一寸振返つて見た
が急いで行つてしまつた。小犬は立留つ
て考へて居たがなきながら元の石段の所
までよろ／＼歸つて来た。僕はかはいさ
うになつたから家まで連れて来てお母さ
んに頼んで一晩とめてやる事にした。牛
乳の残りとお飯とをやるにすぐたべてし
まつた。よほど腹がすいてゐたのに違ひ
ない。一晩とまり二晩とまり遂に皆から
マルと言はれて今も僕の家にゐる。

おまつり

川の水のはじまりのところへいくと、
おかげらがはじまつてゐましたので、す
こしみてゐると私のうちのおとうさんが
「さ、あへへよ、また、よばれてつからこ
う」といつたのでいきました。すると小
田川のうちへはあき子さんとみつ子さん
がきてゐました。さうして小田川のうち
のおばさんがふき子さんをしんるものう
ちへつれていつてやりました。さうして
私が小田川のうちへいくとあき子さんが
「美世子さんこんびらさんの方へあそび
にかんげ」といつたから私ははづかし
さうしてこんびらさんの方へいくとおほ
ぜい人がゐりました。そしておかげらを見
てゐるとあき子さんがどつかへいつてし
まつたのでみつけてゐると、やう／＼み
つかりました。さうしてそこいらのみち
をみあるいてゐると大きな木に、くまん
ばあの方がゐりました。そこでは二三人
はちにさされました。それから小田川の
うちへいつて、又私とふき子さんとおと
うとと、おとっさんでうちへかへつてき
ました。

姉に生れなかつたら
よかつた

山梨縣北巨摩
郡多麻校尋三 宮崎美世子
私はこんびらさんのときに小田川のう
ちへよばれていきました。私のうちのお
とうさんが私とおとうとふき子さんを
つれてよばれていきました。そして小田

のお居間へかけこんだ。
母「又けんかかね、久子(私の名)は姉さ
んだからまけていなくつちやあだめです
よ」。としかられた。私は仕方が無い
ので、
私「でもく」。と言ひながら念にかなし
くなつてお蔵へは入つてシク／＼泣いて
ゐるとそこへ妹が来て、
妹「姉ちゃんどうしたの」。と私のそ
ばへよつて顔をのぞく様にする。
私「本當に俊子(妹の名)はよい子ねえ
」。姉ちゃん大好きよ。



(賞) 丹 牡 葉
六二町仲塚大川石小市京東
子 保 崎 宮

新聞配達が通ります
牛乳配達を通ります
私がかばんを下けて学校へ行く頃
本屋が起きます
藥屋が起きます
始りのベルが鳴る時
私達が集ります
先生がいらつしやいます
それからお歸りの時まで
遊びます
私達が學校から歸る頃
西の空が染ります
豆腐屋のラッパが聞えます
お夕飯の濟んだ後
皆で遊びます
復習をします
そして私は眠るのです

お起さなさい春が来た

長崎市今
長崎十九
松尾芳男
小鳥が鳴いて起しても
太陽の光が揺つても
何故に二人は起きないの
臺所からブレッドの
匂ひが二人を起すのに
流れて來るのがわからない
窓から春が起きなさいと

呼んでゐるのがわからない
どんな夢を見てゐるの
朝が來たのよ起きなさい
ていそう
長野縣上伊那
郡長藤校尋三
池上房男
下の大道を
ていそうが
いそがしさうに
とんでいつた
鶯

長野縣下伊那郡
下川路校尋三
中平初恵
つんほのおばあさんが
鶯が鳴いたら
おしへてくださいと
いてゐますが
鳴きません
鳥

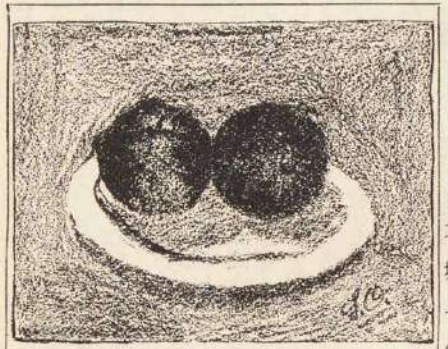
新潟縣中頸城郡名
香山村妙香校尋五
岸本サダ
枯木に鳥とまつた
風が吹いたら かがつた
シモヤケ
東京東中
野六七五
長尾セイジ
オフロヘオテツケタカラ
イタイノガ
フツイアツイトニゲテツタ
(四應)

私は言ひながら涙を手でふく、妹はなほも私に、
妹「姉ちゃんだまつといでよ」。私が又お父さんにを言つて上げるか。と言つてお蔵を出て行く、間も無く繪本を澤山かへては入つて來た。
妹「姉ちゃん御覽」。と言つて繪本を開らき、
妹「ねえ、これは何に」。などと私に問ふから私は直ぐ妹が可愛いくなり、私「ねえこつちへおいでねんねして教へて上げるから」と妹を自分のそばへねせて色々を教へてやる。

ある日の朝

兵庫縣尼崎
小學校高二
増田義信
溝の中で一匹鼠が自分の身を危いのも知らずに御飯粒を食べてゐるのを猫はちつと溝板の上でにらんで居た。しかし飛

久し振りであつた足立先生
鳥取市栗谷町
小學校尋五
廣谷珠枝
今日は朝から郡の先生がたくさん私の學校にお出でになりましたので私たちは今日こそはこれまでの學術をあらはして先生方に見ていただかうといつしやうけり
ゴ(賞)
東京市深川
數矢校尋六
大堀七郎



掛らうとはしない。しばらくすると魚屋がやつて來た。ふと鼠は頭を上げた拍子に猫の居るのに気がついたと見え「チョコチョコ」歩き出した。その時猫は石を投げるやうに溝の中へ飛び込んだ。おやと思ふと猫が溝の中から鼠を口にぶら下けて上つて來た。魚屋は「捕つたな」かう云つてニココリ笑つた。

静かな夜

東京市慶應
幼稚園六年
菅原實
電氣は部屋中をてらしてゐます。柱時計は部屋中を自分の音でひやかせてゐます。静かな夜です。急に遠くから大人の笑ひ聲がしてきました。それがやむと時計は亦ひとり「チクタク」と音を立てました。
電氣は前と同じくかゝると部屋中を明るくしてゐました。
急にジーと音がしたと思ふと「ブーン、ブーン、ブーン、ブーン、ブーン、ブーン、ブーン」と時計が八時を知らせました。知らせるとまたもとの静かになりました。本當に静かな夜です。

んめいでした。
その先生方の中には私の學校から出られて知つて居る先生がたくさんゐらつしやいました。一校時三校時は何事もなく多くの先生方の前で勉強いたしました。一番終りの時間になつた時入口を開けて一人の先生が私たちの田中先生にみらびかれてお入りになりました。其の時皆はいつせいに驚きました。其の先生は今の田中先生のおいでにならない前この六の組においでになつた足立先生でありました。けれども足立先生はそんなことにむとんちやくでした。と教だんに上ると「やあ皆さん久しぶりでした」と元氣のよい聲でごあいさつされましたので皆もあわてゝ禮をしました。足立先生のお顔は相變らずまつ黒い色をして目は光つて居ました。

先づ、足立先生は、教室のぐるりを見まはしてから「私は皆さん方が、よく勉強してゐることがわかります」とおつしやつて、大變うれしさうな顔をなさいました。私だちも足立先生のお言葉を聞いてほんたうにうれしくなつたのでした。



通信

自由畫を選して

山本鼎

△テッサンの良い畫が次第に多くなつて来るのはうれしい。物をよく見、そして落着いて描く風はなにより結構です。△大堀七郎君の「リンゴ」りんごはよく描けて居ます。葉をも少し注意深く見てもらひたいです。それからバツクが無意味に塗りすぎであります。りんごの實際の關係を色合や濃淡の方面からもつとよく見る事ですね。△宮崎保子さんの「葉牡丹」骨折つてしつかりと描いてあります。これでそれ／＼の葉の立體としての蔭日向をつつて居るのに注意がされてあつたらもつとよくなつたでせう。かういふ寫實的な畫にはやはりさやうな眞實が描かれてほしいと思ひますね。

△村田三男君の「キエラソの瓶にコップ」はなか／＼たしかに描けて居る。見方もぞんざいでなくてよい。たゞバツクとしての板の間が瓶やコップとしくりしない。鉛筆の線の方向などが悪いのでせう。

△西本義秀君の「吉坂峠より」は例によつて面白いが、一方に物が奥深く観る事も怠つてはいけません。事柄を描くのはいいが、物象を観る眼を失つてはいけません。

△高木國子さんの「父さん新聞を見ると」はうまいもんだ。おもむきよく出て居るし、形もいゝ。殊に顔はよく描けて居ります。

今月號の幼年詩に就て
若山先生より(書簡の一節)

困つた／＼、齋藤さん、初めあまりに多いのにキモをつぶし、やがて、見はじめて佳いもの、多いのにびつくりした。二度三度見て行くうちに、何だか頭が變になりましたよ。實にうれしかった。それに、きつと、こんな所に来てるので急いでおいでるだらうとこちらでも氣をもらんで、うろたへて昨日送りました。選後感を書くのを忘れた。書いたら今日書きますが、これから天城山でつべんまで登ります。間に合つたら出していただくとい

童話を選んで
齋藤 佐次郎

△應募童話の数の多いのには毎月驚かされませんが、童話がこれ程盛んになつたのかと思ふと、うれしい氣がします。▽今月も力作がなか／＼澤山にありました。先づその中で土橋力さんの「手白猿」が目をおきました。よくある話ですが、なか／＼面白く書けてあります。この作者はまだ大變に年も若いから、今にきつと立派なものを書く人になるだらうと思つてゐます。▽寺島西男さんの努力には本當に感心してゐます。この人程に骨を折つて童話を勉強して居られる人は、恐らく「金の船」の投稿家中にもないだらうと思ひます。今月の「悟りの鐘」は面白く讀みました。筋としてはよくある形式のものだけに目新しい印象を與へないのが損なことも、書き現し方に硬いゴツ／＼した處があつて、柔味のないのが残念に感ぜられました。

新しく出た本

◆青みゆく月 (水谷勝先生著)「金の船」の五月號に「居眠り王様」をかゝれた水谷先生が「寶石の夢」以後の作をあつめた詩集です。同じ詩でも水谷先生の詩は、だれにも判りよい、やさしい詩です。てのひらの、七つのはくろ、かはゆらし、見るたびごとになつかしむ」だの「あんまりきれいに、咲いたから、しぼんで枯れるか、かはいさう」だのと、どれも／＼ほんたうに涙ぐまれるやさしい詩ばかりです。この詩集を繕いてあるといつしは青みゆく月のなつかしさが感じられて來ます。(四六版、百六十七頁、箱入天金、定價一圓五十錢、東京神田仲樂堂野一七近代文明社出版)

◆ほうほう堂 (弘田龍太郎先生樂譜集) つひ先頭、岡本錦一先生が背景をかゝれて作曲の發表をされた弘田先生の樂譜集です。ほうほう堂以下白秋先生の童話九篇に作曲をなされて一巻とされたものです。装幀と挿物は石井錦三畫伯の筆になつた、細張りの目も覺めるやうな立派な本です。これほど立派な樂譜集は他にはなからうと思はれます。(四六版、三十六頁、天金、定價一圓八十錢、東京銀座尾張町アルス出版)

◆蝙蝠の唄 (茨城縣若柳校童話集)「金の船」やその他の新聞雜誌に、優れた童話を發表して、童話挿畫校と唄ばれてゐる茨城縣若柳小學校の生徒さん達が作つた傑作童話二百六十篇を集めて岡本先生の装幀になつた美しい本です。野田雨情先生が、郷土の自由な言葉、それだけで、親分のゐるのに、茨城の平野の中で都會といふ都會も見ずに集めてある若柳校の子供さん達が、少しの飾氣もない郷土の言葉でかゝれた童話が、この「蝙蝠の唄」です。私が最初この稿を見たとき、その作品の純朴さといつちいらしさに、たまらないほど涙ぐましくなつて來ました。と序文に言はれた通り、かくまで純眞な童話があらうかと全く涙ぐまれます。(菊牛形二百六十頁、定價九十錢、東京神田錦町一ノ一米水書店出版)

◆童話掲載外佳作 △手白猿 (土橋力) △悟りの鐘 (寺島西男) △白い小鳥 (根本はる) △水晶の御殿 (宮島峯子) △鈴子さん (大島重三) △惠澄の死 (田龍二) △或る男の子 (伊藤一雄) △草笛 (西塚文雄) △浪二の蝙蝠 (長谷川國光) △鴉の黒いわけ (鴻巣博) △時夫さん (病氣です) (山崎浩一郎) △野村さんと (松野一郎) △不思議な玉 (藤井由春) △うどん (青木曉花) △南風の面 (山田あい灯) △黄金の壺を得るまで (宮永武夫) △とつちやん (綱岡春雄) △蠟燭の夜 (久保) △馬木橋と天女 (野村兼吉) △よい音楽家 (千葉トモ子) △琵琶法師 (川崎春洋) △兎と小鳥 (望月太郎) △思ひ出 (童師久義) △お婆さんの話 (水越光男) △期と干柿 (深水正義) △鹽原多助 (細部とり子) △忘れみやうが (長谷川てる子) △羽子板とお人形 (鈴木仙三) △神様の罰 (米田延次郎) △本當の鐘 (牧野眞砂子) △七化狸 (日野玄一郎) △ジヨウの運命 (大海樓) △うさぎの耳 (太田謙)

綴方の選後に

本月も齋藤先生がお忙しいために、私が代つて拜見することになりました。この後も齋藤先生の御都合で、引き続き私が拜見するやうになるかも知れません。前號に比べると本號は、總じていゝ作が集りました。川村花子さんの「唱歌帳とねえさん」は随分純ないゝ作でした。ことがらも面白いし、花子さんの氣持もよく出てゐます。口をとがらして怒つてゐる姉さんも目に見えらやうに浮んで來ます。藤澤福子さんの「電車の中で」は、これも、よくかゝれてゐました。少しも飾らずに眞直にかゝれたのが大變面白く思ひました。長谷川てる子さんの「可哀想なヒス」吉田みきさんの「たてまひ」北小路敦俊さんの「正直はとく」どれもよくよく出来てをりました。前號でも申しました通り文章を飾る氣になつたり、洒落たことを云

△標本はるゑさんの「白い鳥」はこれまでに紹介したことのある「霧のねがひ」や「迷の森の小メクラ」に似たもので、可愛い真珠を見るような美しい気のものでした。
▽宮島峯子さんの「水晶の御殿」これも同様な意味で美しい可愛らしい作でした。大島重三さんの「鈴子さん」も佳作として挙げるべき作でした。尙この外にもいろいろ興味ある作がありました。評は略します。

童謡の選後に

野口雨情

△方言や訛をもちひてかいた童謡と、標準語によつてかいた童謡とは、どちらがよいかと云ふ質問と、標準語に構はないとすると、教授上に矛盾がおきて、そのために迷つてゐると云ふ通信とが、二三小学校の先生から來ました。
△このことについては、どちらの學校でも、お困りのやうに思はれますから、ちよつとお答へをいたして置きます。
△標準語によるのが本當なものです。けれども、標準語では、どうしても充分に言ひあらはれない場合があります。手紙のやうに、意

味がわかればいゝと云ふものでしたら別ですが、童謡は唄つて味ふのですから、勢ひ言葉の調子が大切なのです。言葉の調子を整へるために、又、その感じを言ひあらはすために、標準語をもちひるよりか、方言なり訛なりをもちひた方が、適切であつた場合は、無論標準語に臨む必要はないのです。そこが童謡の自由な天地なのです。
△方言を交へたために、非一般的の童謡になつて、その意味が一小部落の子供さん達にしか解らないものになつて了つても、その作品が優れたものであれば、童謡のお役目は充分なのです。
△童謡によつて、標準語を教へようとしたり手紙の書き方の助けにしようと思つては間違ひます。いつも言ふ通り童謡の目的は、童謡によつて、現代教育の缺陷と云はれてゐる情育の一助となればいゝのです。
△一口に言へば、その童謡が方言であらうと訛があつてあつても、子供さん達の情操を養つていけるだけのれうちのものであれば、いいのです。

鶺鴒の手帖

▽富市地区で開かれた本居長許先生演義の童謡音楽會は二日間に一萬二千名の入場者があつて、富市に於てはかやうな盛會は前例のないこととあります。おそらくは全国のレコードだらうと思はれます。(廣島市 西田子)
▽岡本歸一先生の「青い鳥」の繪葉書は、何んといふ美しい繪でせう。私は、奈良高女にゐますお友達から送つていただきました。(東京都 小野鈴江)
▽私の學校で學藝會のとき、齋藤佐次郎先生

の「鶺鴒の手帖」を朗讀しましたが、雅若丸が可哀想になつて替な泣いて了ひました。(福島縣 飯土井きよ)
▽中山晋平先生作曲の「ボチの學校」は、まあ可愛い童謡です。私の學校では一年生から三年生まで毎日歌つてをります。(静岡県 橋塚奈美子)
▽「童謡と子供の實際教育」は茨城縣眞壁郡若柳校栗野先生宛にお申込みになれば賞費二十錢で頒けて下さい。(記者)

金の船 誌友募集

「金の船」の誌友には、いろいろの特典が御座います。今や月々非常な勢で増加して居ります。誌友規則は金の船社宛にお申込み下さい。すぐお送りいたします。奮つておはらい下さい。

▽岡本歸一先生のエハガキは賞にすばらしい人氣です。發行以來まだ幾月にもなりませんがに數千部を賣りつくしました。殊にお伽エハガキの方が一層人氣に投じて、いくら刷つても足りない程出るといふ有様で、本年中には數萬の發行部數になる事とせう。
▽沖野岩三郎先生が朝鮮と滿洲へ講演旅行をなさるにつき五月四日の夜金の船社主催で東京萬世橋樓上ミカドで送別會が開かれまし

た。沖野先生御夫婦をはじめ岡本歸一先生、野口雨情先生、本誌主幹齋藤佐次郎先生は勿論のこと、お客様として與謝野品子先生、與謝野寛先生、朝日新聞の根本吐峯先生、その他文士の方々が來會されて楽しい心地よい送別會が開かれました。いろいろと朝鮮や滿洲の面白いお話が出て會が終つたのは十時を過ぎた頃でしたが、約二ヶ月の後に沖野先生がお歸りになれますが、その時には金の船社主催で大々的の歡迎會が開かれる筈です。

▼童謡掲載外佳作 △啞(富田孤村) △眼り草(金原五郎 △夕暮れ(今村治郎) △鳩(佐々木三郎 △不思議な箱(野口茂雄) △赤いお家(矢頭茂郎) △ふくろふ(渡邊孝一郎) △風(高山清水) △雀(森田克己) △はれた扇(田中武夫) △あまたれ(脇山行子) △日曜日の朝(西澤武夫) △金魚(森野男) △鶯(花世男政子) △お月さん(堀田双葉子) △枯れ萩(古田寛英) △かもめ(筒井丑松) △びと(佐伯無光) △煙突(望月述雄) △かつこのめんめ(中村ゆたか) △小さな暴雨(福多眞砂子) △ひばり(大誠) △水車(田島味津三) △夕徳(森谷傳吉) △櫻網野まんなる △カナリア(鈴木武良) △小藪の鶯(益谷光則) △まい(つぼう(浅井千別) △つくしんぼ(本田みるの) △マツチの棒(飯田春壽) △静かな夜(山中一雄) △かけつ(青木ミチ子) △雀の番兵(尾田誠一) △南豆腐(福島青子) △夜光蟲(宮崎正善) △小蜘蛛と芋(宮島峯子) △夜汽車(竹澤みちる) △小蜘蛛と芋(等々力愛路) △山寺(永野壽雄) △銀の星(柳澤清) △椿(深川長治) △白い小馬(細江敏) △風仙花(石井敏) △梅拾ひ(樽本星花) △夜明けの鐘(今岡伸) △風(副島とく) △歸り路(青木羊村) △栗畑(藤松勝光) △町が見える(瀬川水燕) △雀の子能登(すけ) △春を待つ小舟(木蓮花) △おくら鳥(近藤 郎) △野原の眞馬(瀧敏雄) △お山のお角力(打つた) △小さい兵隊さん(廣瀬光江) △籠のカナリア(篠田文雄) △お豆(堀下きよ) △花(山本信雄) △鶺鴒の小人(山田三郎) △空(草野しげを) △鶺鴒

なし(大橋みつち) △うめ(藤原秋子) △すいめ(中ノイ) △きのふ石(石原秋子) △んしんばしら(鈴木ハル) △謎の夜(久保村千菊) △荷車(伊藤登良男) △ヒョーン(池上昌子) △ふし(大枝宗太郎) △啞(青木こと) △雨の日(狩野徳三) △土方(石山正治) △雨(清水源夫) △ゆめ(井出千秋) △はれるなみだ(後藤良野) △櫻(廣谷珠枝) △ひでこさん(春日米子) △春の野(森澤桂) △平島松雄(お月) △奥水保雄 △びんがた(鳥原ふみ子) △お石(橋岩蔵) △高島先生(廣瀬雅司) △からす(左武善十郎) △小島(島山武夫) △お酒によつた老人(本木カナエ) △おとめ(嵯澤カツ) △朝日(権垣美枝子) △兄さん(あられなくつて) (後藤眞三) △お寺の木(石井野輔) △トリカシラ(長尾関子) △噂の晩(梶川富久) △思ひ出(丸島静子) △ランプ(戸部甲子雄) △だんご(後藤静子) △お庭(伊藤ます) △カタバシヤ(小林正夫) △工夫さん(八子榮吉) △月(川島徳三) △おくら(篠原四朗) △踏切番(池田すみ子) △あはつた小使(藤原喜和子) △湯槽にて(尼野定子) △つくつくぼうし(桐根貴之助) △私は知らんよ(梅村登美子) △小藪(飯田春壽) △鐘打(宮島鈴枝) △馬力(大塚三三) △竹のとんぼ(藤原清) △でんき(宮崎眞子) △もいたらう(大里しず子) △にんぎょ(大瀧美佐子) △山のぼり(三浦竹代) △へうたれ(今田徳太郎) △松橋かみ子(三澤よ) △雪の夜(岸本サカ) △月夜(竹内ヨシ) △むぐらめ(植木武雄) △すまふ(川島徳三) △大きな河(小林とき)



編輯室より

△都にも初夏が参りました。お日様はカンカン照ります。街路樹も生々と青葉を茂らせました。本當に気持ちのよい季節となりました。皆様お變りもございませんか。記者一同壯健に活動いたして参りますから御安心下さい。△前月號は大變に遅れて本當に申譯がございません。金の船がキンノツノ社から別になつていよいよ大發展をいたすことになりましたので、事務の引つぎやら其の外いろいろのため大變にひまなとりました。それが爲めに止むなく發行が延びてしまつて本當に申譯がない事です。今度からは大に注意いたして「金の船」の發展のために奮闘いたします。どうぞ皆さ方もお力添へをお願いします。△九月の特別號が直ぐに参りますが、今度は一つたの増大號でなく、いっぞやのアンデルセン號のやうなズバ抜けて變つた面白い趣向のものを出す積りで、編輯員一同大に活動いたして参りますから楽しみにお待ち下さいまし。

ます。此の間も實に面白いことがありましたから一つ二つお話しいたしませう。つい先頃麻布仙臺坂上の安藤記念教會で「金の船」後援の講演會を開きました時、小羊の群の少女さん達が氣勢出て、最初に野口先生の「雀の酒盛り」を合唱される事になつておました。△ところが面白い事には、この安藤記念教會を建てた前ハヤシ總領事の安藤太郎先生は日本で禁酒運動を起した有名なお方なのです。それと氣づいた野野先生が主催者の米山星二郎さんと呼んで「もしも」米山さん、大變大變、安藤さんに敬意を表させよう。禁酒の先生の教會で「雀の酒盛り」を歌つては申譯がないといはれたので、あわて、「雀が酒盛りしてたとサ」と「酒樽た」といふ飲んだとサを抜かして、前の半分だけを歌ふといふ滑稽を演じました。少女達が半分だけ歌つてお辭儀をした時野野先生が隅の方でクス／＼笑つておられました。△これはまた別の話ですが、この間野口先生が童謡で有名な茨城縣若柳校へ行かれた時、生徒さん達は先生の来るのを一日千秋の思ひで待つて居られました。野口先生が来たから「たべさすんだ」といって全校の生徒さん達が一日前へ行つて片づめをしたさうです。

▼綴方載掲外佳作 △次ちゃん(常田筆) △うちのり(三井みどり) △風(近藤浩) △鉛筆(堀江) △松尾(つぐみ) △村井初枝 △我が妹(伊藤治) △村の夕暮(門脇光男) △桃の節句(四方多美) △運動に必要 石原後水) △日記の一節(西川利男) △初午(大塚好之) △春の日暮(中本正信) △日本と支那の戦争(左武善十郎) 私のねえさん(和田稔恵) △二年前(伊藤ます子) △親しい(高羽四郎) △僕のあやまち(北小路養後) △僕(山口時男) △堀の香(鈴木春光) △無花果(伊藤松之助) △春(廣野金市) △初冬の田舎(菅野五郎) ◆金の船誌友 ○宮城 荒川陽一君 ○朝鮮 大坂金太郎君 ○東京 小田暉君 ○岩手 菅野郁子君 ○東京 鈴木秀男君 ○秋田 高桑登君 ○三上清君 ○山形 西川さとう君 ○群馬 關根もと君 ○大分 奥田茂君 ○東京 窪田秀雄君 ○愛知 遠藤守種君 ○鹿児島 鬼塚あや城 藤岡文子君 ○大阪 大塚好三君 ○茨城 高野みつ君 ○東京 高藤貞之進君 ○北海道 川村吉美君 ○群馬 青柳花明君 ○朝鮮 河野幸江君 ○東京 長谷川てる子君 ○北海道 聖園小学校 ○朝鮮 高橋正直君 ○奈良 山本赤元君 ○北海道 成田うめ君 ○鷲澤しげ君 ○那須文和君 ○菊地エ君 ○井口ハギ君 ○石川正孝君 ○東京 丹澤アイ君 ○神奈川 大橋平君 ○東京 久保田公平君 ○岡山 山倉三三君 ○福島 大森新三郎君 ○東京 山村ゆか君 ○廣島 名村定三郎君(以下次號)

愛讀者皆様へ御挨拶

金の船の改革と發展

「金の船」は、創刊號(大正八年十月)以來、學校と家庭と、教育と文藝の一致に努めて來ましたが、曩頃他に率先して新しい童話童謡の講演部を設けて、實際の運動にとりかゝつてみますと、子供さん達の教育に心をもちひらるゝ父兄方はもちろん、北は樺太、北海道から、西は朝鮮、滿洲の植民地、南は臺灣遠くは布哇邊まで、家庭に、學校に、大變稱讃を受けました。發行部數も急に増えて、これまで通りでは、愛讀者皆様方の御厚意に背きはせぬかと云ふ懸念がありましたために、この際一大改革を行つて、これまでの編輯所であつた東京市外田端三五一番地「金の船社」に發行所を移すことになりました。從新しく入社も致しましたから、いよいよ「金の船」は整然とした立派な雜誌來の記者、社員外に二三名となつて、皆様方の御期待に副ひますこと、信じます。投稿、其他編輯に關する御用件、御註文、其他事務に關する御用向は、總て東京市外田端三五一番地「金の船社」宛にお願ひ致します。たと今までは、編輯所と發行所とはなれてをりましたために、誌友の皆様へ對しても、往々手落ちもあつたらうと思はれますが、今後は、迅速に御便宜をはかることが出來ようと存じます。「金の船」の改革、發展につきまして、誌友並に愛讀者皆様方へ一言御挨拶申し上げて置きます。

東京市外田端三五一番地 金の船社

振替口座 東京五九五六番 電話 小石川五三八七番

金の船講演部報告

沖野先生が金の船を代表して 朝鮮、滿洲へ、童話普及の旅に

▼若柳小學校童話會（茨城縣鹿野郡）四月三日午後一時から若柳校に童話講演會が開かれました。金の船から、野口先生が出張されました。若柳校は郷土童話播種校として名高いために、この子供さん達は随分熱心に童話を歌ったり作ったりしてゐます。最初、久保田校長先生が、開會の御挨拶を述べ、栗野柳太郎先生が童話會を開いた主旨のお話ですむと、子供さん達が「金の船」の童話を合唱しました。この日は丁度隣村の大貫小學校の生徒さん達も来て、矢張り「金の船」の童話を合唱しました。それがすむと野口先生が、自分が子供の頃のお話をしたり、子供さん達に童話を歌つて聞かせたり、ほんたうに親みの深い、盛會でした。その夜、子供さん達は野口先生と別れを惜んで夜の更けるまで學校の庭で童話を歌つてをりました。

▼安藤記念教會童話童話會（東京麻布）四月十五日午後五時から、安藤記念教會で開かれた童話童話講演會は盛會でした。金の船から沖野、齋藤、野口の三先生が出張されました。最初に、米山星二郎氏が指揮される小羊の群の少女さん

ん達が「金の船」童話の合唱をされました。それが終ると、沖野先生の「ジミイの仕事」といふ題で今月の「金の船」の巻頭に掲げられてゐる。大統領様へのお話をされました。それが終ると野口先生が「童話を作るやうになつてか心が優しくなつた子供さん方の「實話」をされて壇を降りますと、再び沖野先生が「ジミイ」少年の續きをお話になりました。聴いてゐる子供さん達の中には涙を浮かべてゐる方さへあつてそれは、深い感動を與へたやうでした。平和はしみん、思つた事せう。近くまはた會を開く約束をして九時半に閉會を致しました。

▼目白福音教會童話童話會（東京府下春倉）四月十六日午後一時から、目白福音教會で童話童話講演會が開

金の船講演部規定

- ▼金の船は、新時代の童話と童話を普及するために、講演部を設けてあります。
- ▼小學校の童話、童話の會や、子供さん達のおつまりの會へは、お招きに應じて出張いたします。
- ▼講師は、童話は沖野岩三郎先生、童話は野口雨情先生が擔任されます。童話なり童話なり、御希望に應じて出張されます。但し他に講師のあるときはお断りいたします。
- ▼講演は、先生方のお仕事の都合上、月の十五日から二十五日までの間に制限いたします。尤も、繰り合せのつきます時には制限外にも出張いたします。
- ▼講師に對しては、東京市内なれば車代地方なれば往復旅費、宿泊を要する場合は宿泊料を依頼者より御支辨を願ひます。
- ▼講演お望みのせつは、東京市外田端三五一「金の船」宛に御照會下さい。

かれました。金の船から、沖野先生と野口先生とが出張致しました。會場内は子供さん達でいっぱいでした。最初野口先生が童話のお話をして、次に沖野先生が童話をお話になり、又野口先生が童話をお話になり、おしまひに沖野先生が、又童話をお話になりました。沖野先生の面白いお話に、子供さん達、手を拍つて喜びました。野口先生の童話に、矢つ張り手を拍つて喜びました。ほんたうに愉快な會でありました。

▼沖野先生童話の旅、前號にもお知らせした通り、朝鮮、滿洲の小學校や、そのほか子供さん達が集りの會から、せひ沖野先生に来て、新しい童話を新領土や植民地の子供さん方に聞かせて貰ひたいとお申込みが澤山あります。ために、いよいよ、本月八日に沖野先生は、朝鮮、滿洲へ向けて童話の旅におのぼりになりました。待ちに待つてある子供さん達も、學校の先生方も父兄のお方々も、どんなにか喜ばれることせう。金の船は、これから益々朝鮮滿洲の子供さん達にも深い親



読者よだり

▽綴方の時間に先生が、近藤藤賞が當つたと仰つたので、驚いて先生の傍へ行つて見ると、これは「嬉しい」十五夜お月さん」が来てゐました。急いで開けてよるこんで障みしました。記者先生有難う存じます。それから「金の船」四月號の齋藤先生の「梅若丸物語」は、母が泣き、読み、可愛いさうだ、と申してなりました。(埼玉 近藤浩)

▽先日富岡山でマールリンクの「青い鳥」が来た時は、そればすばらしい人気がした。私も大變な期待を持つて見に行きましたが、やっぱり期待に反しない本當に無邪氣なばかりでなく、藝術的にも深いものを見出し、對する親しみが深くなつて参りました。昨日に於ては、金船の四月號で、第一に目についたのが「金の船」の四月號で、御座いました。それにアンデルセンお伽断でなつかしい岡本先生の畫が私を引きつけました。私は水久に「金の船」に乗る子供一人に加はることにしました。昔懐かき下さいませ。(岡山 山)

汀うたを)

- コノアロハダ
- カツテモラツタ「金ノ船」
- コノアヒダカツタ「金ノ船」
- オモシロイオモシロイ
- コノアヒダカツタ
- 電氣チオロシテヨシナ
- オモシロクテ)
- ナラナカツタノデ
- ナホモツツケテヨシナ
- オモシロイオモシロイ
- マダアレバヨカツタノイト
- オモツタラナカツタ (富山 石川久清)
- ▽今度平和博へ行つた時、鶴岡所へぜひ行きたいものです。その時は、(長野 山田明)
- ▽どうぞお遠慮なくいらつしやい。(記者)
- ▽世界名作童話物語の一冊になつたものがありません。發行所定価送料等をお知らせ下さい。お願ひ申上ます。(北海道 相澤政三)
- ▽い別に出版はあませんが、本社發行「金の船」のアンデルセン號がよろしいかと思はれます。定価三十五錢。送料一錢です。(記者)
- ▽私の愚作に入賞の榮を賜り、お禮の申上げやうも御座います。私も今後益々勉強してよい作品を投書致し度く心懸けてをります。先づは入賞のお禮を申上げます。併せて「金の船」の發展を祈ります。(茨城 海老澤秀夫)
- ▽戊午を迎へると同時にこの美しい面白い種々なそして藝術的な「金の船」の誌友にして

戴きました。誌友になつてから楽しく教授が進行致します。兒童は昔喜んで童話を作つてゐます。五月號の出版の皆一日待ちにして待つてます。記者先生、愛讀者の方々、どうぞ宜敷くお願ひします。(北海道 脇山汀子)

▽自由畫ほどの位大きさに描いたら宜敷いでせうか。(東京 石山正治)

▽學校用の畫用紙位が一番結構です。(記者)

▽記者様は四日の航海を楽しく穏やかに過す事が出来ましたが、かつ風の吹いて土ほこりでも先が見えませんでした。支那人町を通りましたが、どこを見ても支那人らしいと思ひましたのは、赤や青の紙を貼つてある物で立派です。いまは常磐本がありませんが殺風景で御座います。五月頃が大變い、やうに開きました。(大連 二瓶けい子)

▽たんばの花がうれしうに咲きました。可憐なすみれも美しく優しく咲きました。蝶も何處よりか舞ひながら来ました。あゝ實際うれしくて病の身のことまで忘れてしまひます。(長野 藤松勝光)

▽「金の船」では新進作家を深山に紹介して居られて實にうれしいと思ひます。五月號の伊藤温子さんも志村照子さんも投書家の中から引上げられた立派な童話作家になつて行かれます。私は伊藤さんの將來に大に注目をしてゐます。御書簡を新る(北海道 谷口生)

▽金の船の發展には驚くの外ありません。私

野 水野成三

▽野野先生が朝鮮へお出かけになられるといふことを聞きました。どうかそれによつて、朝鮮全土の子供が一人残らず「金の船」が好きになるやうにして下さい。(無名氏)

▽「梅若丸物語」は本當に可愛いさうなお話ですね。私は「泣かされた」あつた。あつた川畔に鳴が来て「ヒョー」/といふ處などはうとりさせられました。齋藤先生、またあんな物語をお書き下さい。(東京 河合花子)

▽寒い冬がやつと過ぎ去つて、櫻咲く暖い春がおとつて来ました。今頃東京は博覽會でたいへんな賑ぎでせう。家も一度は博覽會でいたいと思ひますが、家の都合がゆるりませんで不平をこぼしながら、それと直つて大變愉快になりました。(千葉 川上次郎)

▽僕は五月號の三島章道先生の「一騎打ち」が大變面白かつた。川中島の戦が本當にわかつたやうな氣がした。武田信玄も上杉謙信も本當の武士だと思つた。(大阪 山口次郎)

▽四月二、三日富市海座で本居先生の音楽會がありました。それは私等童話狂が待ちに待つて来た。さうなので、すばらしい人気が出た。もう會場へはぎつたりつまつて身動きも出さぬやうな有様でした。私等は本居みどりさんの舞踊と舞のいふことには驚かざるを得ませんでした。だれも聴衆は驚嘆してゐました。かうした會はたび/あつていいと思ひます。どうか野口先生も沖野先生も是非一度来て戴くと結構と思ひます。(廣島 米田敏夫)

は外の雑誌も見ましたが、「金の船」のやうに充実したのを見た事がありません。岡本先生の畫は僕の理想通りですから尚更好きです。「父戀し」の淋しい便りのさしみの、式江小母さんが心配さうな顔をしてゐるのを御覽下さい。僕は本當に感心しました。「父戀し」はい/佳境に入るのですね。(函館 西條文雄)

▽御多忙中恐縮の至りとは存じますが、

- 一、民話雑誌がありますか。
- 二、童話の作り方を研究説明した著作がありますか。

(東京 まこと)

▽一、民話雑誌のことは小石川宮下町三十六日本童話協會へお聞き下さい。

二、童話の作り方の本は、野口由情先生著東京神田尚文堂發行の「童話作法問答」が一番よろしいです。

▽岡本先生！五月號の口繪の「私達の鷲鳥」は何て美しい繪でございませう。先生！私はかういふ明るい水彩圖の畫が大好きです。油畫でなく、毎月かういふ美しいのをお下さいます。私はアルパムの表紙に今月口繪をばりました。(京都 山川千草)

▽太郎さん/

なにか見てわらふ

金の船見てわらふ

花子さん/

なにか見てわらふ

わたしも

「金の船」見てわらふ (一愛讀者)

懸賞創作募集

自由少年詩集 山本鼎先生選
 綴方 若山牧水先生選
 編輯部選

【意注】

懸賞は何でもかまいません。諸君の日々見たり、感じたりすることから、諸君の好きなものを諸君の好きなやうに畫なり、詩なり、文なりにして書いてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)ともにおとさないやうにしてください。用紙は自由畫になるだけ畫用紙に、幼年詩や綴方になるだけ原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出来た方には「金の船」特製の賞品を差し上げます。次號締切は五月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は七月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地「金の船社」編輯部。

童話

【意注】

童話は二十字語二百行以内、童話は二十行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童話には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童話には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして、「入選」の場合は「金の船」賞を呈します。締切發表宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

一般讀者の創作

齋藤佐次郎先生選
 野口雨情先生選

九四

定價 壹冊 參拾錢 送料壹錢
 三ヶ月分三冊(送料共)九拾錢
 半年分六冊(送料共)壹圓八拾錢
 壹年分十二冊(送料共)參圓六拾錢
 但し四月號九月號は特別號で廿五錢新年分だけ必ず加へてお拂込み下さい。この分だけ必ず加へてお拂込み下さい。

送) 御注文は必ず前金で御拂込み下さい
 金) 送金は振替が一番便利で御座います
 の) 切手代用は(壹錢切手)一割増しです
 (意注) 第何巻第何號よりと書いてください
 △住所姓名ははつきり書いてください
 廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十一年五月六日印刷納本(毎月一回)
 大正十一年六月一日發行(一日發行)

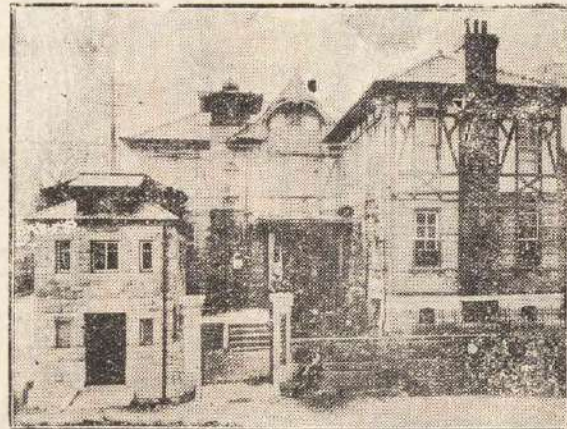
編輯兼發行人 齋藤佐次郎
 印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地
 東京市外田端三百五十一番地
 發行所 金の船社
 電話小石川五三八七番

天下の青年は何故に争ふて大日本國民中學會に入會する乎

講義が新しいから
 會費が安いから
 指導が良から
 學制が正から
 基礎が固から
 講師が善から
 卒業が早いから
 成功が儘だから

會長 尾崎行雄

學監 文學博士 山内繁雄
 顧問 新學博士 三宅雄吉
 井上博士 浮田博士
 岡田前文部大臣



一人前の男となるには
 どうしても中等教育を受けなければ
 いけない。中等教育の學力のない者
 はどうしても生存競争の勝利者たる
 ことは六ヶしい。併し家庭の事情で
 中學に入れぬ者も決して失望するに
 は及ばない、中學校に行かずに中學
 卒業同様の學問をする方法がチャン
 と出来てゐる。それは創立以來二十
 年の古い経験のある講義録で有名な
 大日本國民中學會の通信教授法であ
 る。

大日本國民中學會

東京駿河臺(お茶の水電車通り)
 振替東京四二〇〇 電話 神田三〇〇〇二
 神田三〇〇〇三
 神田三〇〇〇四

創立以來二十年 記念大特典提供 入會の絶好機

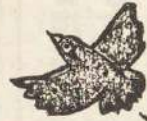
講義録見本つき
 規則書無料進呈



外国船の事ですから、東京へ行つて公使館へ掛合つたり、縣廳へ出頭して手續を聞かせたり、いろいろの面倒な事があつて、たうとう引揚げの許可を得るまで三ヶ月餘りを費しました。

紙手のりよ父

商造は大きな鋼鐵船が、海の中に埋もれてゐるのを、其儘にして置くのは、如何にも惜しいと思ひましたので、それを掘り出す事を計畫致しました。けれども



中形と絞りは

………本年も松坂屋へ！

夏の婦人美に一番調和の好い松坂屋特製の中形と絞りは毎年流行の基準として皆様から多大の御期待を蒙つて居ります

弊店も亦皆様の御期待に背かぬやう本日は一層の努力を以て工夫を凝らして五月一日より陳列會を開催します。貴族の風も爽やかに訪れます、お遊びかたがた御來觀の程御待ち申上ります



野上 東京

松坂屋
いと吳服店



それから三十人ばかりの工夫を備つて、毎日々々砂を掘りましたが、掘つても掘つても、直ぐ激しい浪のために元の通りに埋められてしまひました。どうしてもその船を引揚げる見込がないといふので、已むを得ず事業は中止しましたが、それがために、商造は自分の貯金を、すつかり費つてしまひました。『あア困つた事になつた。私はあの船を引揚げて、五六千圓のお金を儲けて、そしてあの無人島を開墾してみたいと思つたのだが、もうかうなつては、致方がないから、新しい船を造つて、自分一人で、一度あの島へ行つて見よう。そして開墾の見込があるなら、更に出直して家内中皆なで、島へ渡らう。それより外に途はない。』

商造は心の中であう決心しました。けれども、そんな事は式江にも誰にも話しませんでした。

紅い青い美しいお船が出来上つた時、商造の心では、それに乘つて無人島へ行くといふ決心がついて居たのでした。で、隣りの町の田邊の港まで来た時、そこでお米だとか、お醤油だとかを澤山買ひ込んで、すつと和州灘を乗り越して、大阪の川口へ着いたのは三日目の夕方でした。

その夜は川口で汽船の笛を聞きながら、一夜を明しましたが、翌朝から一生懸命に瀬戸内海を西へ〜と漕ぎました。

早く目的の島へ着きたい、早く琉球の島が見たいと、心は焦慮りに焦慮つても、廣い〜海の上に浮んでゐる木の葉のやうな小さいお舟ですから、思ふ通りになりません。激しい波に襲はれたり、恐ろしい風に吹きまくられたりする時は、所も名も知らぬ山裾に舟を繋いで波を避けたり、唯だ運を天に任して、風のまゝに沖へ〜と吹流されたり、何度も何度も死の境を走りながら、たうと

う方角を誤らずに琉球の島の見える所まで漕ぎつけたのは、熊野の港を出てから丁度廿一日目の朝がたでした。

雨風に曝され、日に焼け、腕の力も疲れ果てた商造は、琉球の那覇の港へ着いて、一旦其所へ上陸する事に致しました。

上陸して島の様子を訊いて見ますと、丁度一年前に、外國通ひの運送船がその島を見付けて、乗組員がダイナマイトで、岩石を破碎して船着場を設け、東京から玉田といふ實業家が来て、盛んに甘蔗の栽培をやつてゐるといふ事でした。

詳しい様子を知つた商造は、直ぐに東京の玉田へ手紙を出して、自分が一番最初にその島へ上陸して、十分に開墾出来る見込をつけたのであるといふ事と直ぐに開墾に着手したかつたのであるが、資本が無かつたので今日まで何うす

る事も出来なかつた事と、いよゝ決心して、唯ッた一人で熊野から琉球まで舟を漕いで來た事を詳しく書いて送りました。

すると十日程たつて、玉田から一通の手紙が那覇にゐる商造の許へ届きました。披いて讀んでみると、(さういふ理由であるなら、是非その島へ行つて、働いてくれまいか、島には船を操る人がゐないので困つてゐるのだから、あなたが行つて下さるなら、こちらでも特別の待遇をするから……)といふ意味を書いてありました。

それを讀んだ商造は非常に喜んで、早速那覇の港を舟出して、其の離れ島へ渡る事にしました。

そんな事とは夢にも知らない式江は、毎日々々商造から、手紙の來るのを待

つてみました。作爺さんや熊田先生も、毎日のやうに訪ねて来て様子を訊きました。伊吹子や明次も學校から歸ると直ぐ、

「おッ母さん、お手紙が来ましたか。お父さまからのお手紙が……」と尋ねました。其度毎に式江は沈んだ顔で、

「いゝえ、まだなの。けれどもネ、今日か明日にも屹度お音信が有りませう？」と言つては、窶と涙を拭くのでした。

今日は尙造が家を出て、丁度三十日目だといふ日の朝、明次が鞆を肩にかけて、表の杉垣の所に立つてゐると、畑の間の細路を、郵便屋さんが急ぎ足に、こちらへ走つて来るのを見ました。

「郵便屋さん！ お父様からのお手紙ぢやアない？」

明次はさう云つて、畑の方へ走つて行きますと、郵便屋さんはニコ／＼笑ひ

ながら、

「明坊！ お父さまの手紙ぢやよ。たうとう、あんたのお父さまの居所が判つたのよ。お目出たう。」と言つて、一通の手紙を明次に渡して置いて濱の方へ歩いて行きました。

手紙を受取つた明次は、表庭の所から大聲で、

「おッ母さん！ おッ母さん！ 伊吹ちゃん……早く／＼、お父様からお手紙が来たのよ。早く／＼……」と呼びました。

裏庭の所で、盥にお湯を汲み入れてゐた式江は、明次の聲を聞くと直ぐ、大急ぎに縁側の所へ出て来ました。學校行の道具を鞆の中に納れてゐた伊吹子も周章で飛び出して来ました。

「おッ母さん、早く読んで下さい！」と伊吹子と明次は同時に叫びました。

式江は指さきを頼はせながら、手紙の封を披いて小さい聲で読みはじめますと、伊吹子と明次は息を殺して、ちつと聞いてゐました。

私は思ふ所あつて、あなたに何にも言はないで、新しくこしらへた舟に乗つて、先月の末にこの琉球の港に着きました。私はこれから、大東島といふ島に行きます。その島は私が濠洲通ひの船に乗つてゐる頃、一度上陸して見た事のある島です。私は其後何とかして、五六千圓のお金を手に入れ、この島の開墾をして見たいと思つてゐたのです。所が容易にそのお金が手に入らないので、今日まで延び／＼してゐたのです。所が、今度は思ひ切つて誰にも知らせないで家を出て来ました。そして此の琉球まで来て、様子を訊いて見ると、その島は四五年前に、東京の實業家が開墾に着手して、今は四五百人の人達が入込んで盛んに甘蔗を作つてゐるといふ話です。で、その開墾主に手

紙を出して、私も備つて貰ふ事になり、明日其島へ渡つて行きます。島は私の發見した頃は、無人島でしたが、今は大東島と名をつけて居るさうです。こちらから月に二回の便船があるだけです。私は自分の舟で渡つて行くつもりです。そんな理由ですから、郵便局も無いと思ひます。私は其の島へ行つて一生懸命に働いて、相當の財産を作つたなら、あなた方を島へ呼寄せ、事にしたと思ひます。明次が尋常六年を卒業する年には、伊吹子が高等小學を終る時だから、其時は明次をつれて琉球まで来るがよい。そして明次を琉球の中學校へ入學させて、伊吹子とあなたと二人は、此島へ渡つて来るがよいと思ふ。それまでに貯金の三千圓と、財産の収入とで、生活の方法を立てゝゐて下さい。今度といふ今度こそ、私も人並以上の仕事をして一つの事に成功したいと思ふ。それで度々手紙を貰ふと、私の心が弱くなつて、目

的を達せずにはまた郷里へ歸るやうな事になつては困るから、出来るだけ手紙の往復はしないやうにして下さい。私からも三月に一回位しか、手紙は出しません。それでも私の様子を訊きたいと思ふなら、私へ直接手紙を出さずに、大東島開墾事務所宛で、私が達者で居るか、どうか尋ねるがよい。吳々も伊吹子や明次の身體を大事にするよう。あなたも健康に注意して、二人の子供の身の上を保護してやつて下さい。いつまでも熊野の町にゐて、小さい百姓をしたり、時偶に海へ出て魚を釣るといふやうな事をして居ては、行末が案じられるから、思ひ切つてこんな事を決行するやうにしたのです。これには深い事情もあるのですが、それは何れ面會の節話す事にしませう。五年後には面會出来るだらうが、五年といふ日は瞬く間に過ぎ去ります。明次が中學へ入る時、私も琉球へ渡つて行きます。私がこんなに突飛な事をし

た其の心持は、世界中に私自身の外誰も知る者が無いのです。伊吹子や明次は、私に會ひたいと言ふでせうが、其時は、あなたが能うく言ひ聞かして、明次が中學校へ入學する時は、お父さまに會はれる時だと言つて樂まして置いて下さい。伊吹子も女學校へ入れてやりたいのだが、それは兎に角高等小學を卒業させた上の事にしませう。それまでは此の島へ、あなたと一緒に来るつもりで決心させて置いて下さい。さやうなら！

琉球那覇、玉浦樓旅館にて

読んでしまつた時、式江は袖に顔を埋めて、泣きました。伊吹子も明次も眼に涙を一杯溜めて俯向きしました。丁度其時、杉垣の向うから、

「伊吹子さん、明次さん、學校に行きませう。」と云つて二三人のお友達が姿を見せました。

「あ、皆さんがお誘ひに来て下さつた。さア學校へ行つてらっしゃい。私はこれから熊田先生の所へ、此のお手紙を持つて行つて、御相談して來ますから。」
式江はさう云つて起上りました。伊吹子も明次も泣顔を隠して表へ出て行きました。

伊吹子といつても大變仲よくしてゐる雪子といふ四年生の子が、

「伊吹子さん、どうしたの？」と心配さうに尋ねました。

「いゝえ、どうもしないのよ。お父様からお手紙が來たの……」

「どんなお手紙？」

「お父様は琉球に行つてゐる……」

「琉球？ あの沖繩縣ですネ。

「えエ、さうよ。其所の無人島を發見したのが、うちのお父様だつて……」

「え？ 無人島？ その無人島へ漂流したの？」

「いゝえ、お父様はその島を開墾なさるお心算だつたの。だけどそれは最う東京のお方が開墾して居るのだつて。」

「では、其所で働いてらっしゃるの？」

「えエ、その島へ渡つて行らっしゃるんだつて……」

「まア、遠い所へ行らっしゃつたのネ、あなたのお父様は。」

二人が話しながら歩いてゐる時、後から明次が不意に、

「伊吹ちゃん、伊吹姉ちゃん！」と大きな聲をかけたので、伊吹子は吃驚して振向くと、明次は眼を圓くして、

「あのネ、お父様の行つてゐる所は、昔、鎮西八郎が流された所だよ。僕、今想ひ出したんだ。去年の春ネ、あの権現様の櫻の咲いてる時……それ、覚えてるでせう？ あの時新玉座でお芝居を見たネ。鎮西八郎爲朝が喜平次といふ家來と別れる所……岩の上から爲朝が大きな弓で船を射つた所……貧乏神だの疱瘡神だの、變な顔の神様が出て來たネ。伊吹姉ちゃん覚えてるだらうあのお芝居の事を。」と言ひました。

「さうよ、明ちゃん。そんな嫌な貧乏神だの疱瘡神だのがゐる所へ、お父様は行らしたのよ。」

「さうネ、僕、今それを想ひ出して、大變だと思つたのよ。お父様は疱瘡なんて、あんな恐ろしい病氣にとつつかれはしないか知ら？」

明次は心から心配で堪らないやうでした。すると最初からの話を黙つて聞いて

てゐた五年生の秋子といふ子が、

「伊吹子さん、私の叔父さまがネ、沖繩の中学校に先生をしてゐたのよ。叔父さまに訊くとネ、もう疱瘡だなんて、そんなものは無いやうですけど、あちらには恐ろしい蝨が居るんだツて、ハブといふ毒蛇よ。それに咬まれると、直ぐ死んでしまふんだツて。」と言ひました。

それを聞いた伊吹さんも明次も、お父様が其の毒蛇に咬まれねば宜いといふ心配をし初めました。

「ハブツて、どんな蟲でせう？」と他の一人の子が尋ねました。

「蝨と同じでせう？」

「それに咬まれると、直ぐ死ぬんでせうか。」

「身體中に毒が廻つて、腫れて死ぬんだツて。」

